

例会八〇〇回記念号

第一〇八回子規忌法要

松山子規会例会八〇〇回を迎えて

『松山発子規事典』(仮題)を子規居士に捧げたい

卓話 松山子規会創立当時をふり返って

卓話 子規新資料について

正岡子規と『天降言(あもりごと)』

癸丑吟社とそれを支えた人々

「子規会誌」目録(一〇〇号～一二二号)

「子規会誌」研究対象人物別索引

井手康夫 二

今村威 三

宇和宣 一三

和田克司 一六

福田安典 二一

寫川武彦 二九

風本幸子 五〇

風本幸子 五六

子規會誌

一二二二号

平成二十一年
十月

例会記録

○平成二一年七月例会(第七九八回)

七月一九日(日) 正宗寺本堂

出席者 二二名

講演「正岡子規と『天降言』」

理事 福田 安典氏

『天降言』(あもりごと)は、八代將軍吉宗の二男田安宗武の歌集である。明治三二年八月、子規は「歌の本」を見ていて宗武の和歌に出会い、欣喜雀躍する。その理由は、宗武の和歌が、真の万葉調であり、勁健にして高華、古雅にして清新であること、一点の俗気がなく、子供の作りたるようであることである。この評は、子規自身の和歌にも通じる。明治三十年代に近世の和歌が評価されたのは、佐々木信綱が、子規という評価軸をもとに、研究評論をしたからである。近世にも上田秋成が、実朝と宗武を万葉集以降の歌人として高く評価してはいるが、これも子規の評価を経て認められたのである。近世歌人の頭影について、子規が果たした役割を、再評価しなければならぬであろう。

○平成二一年八月例会(第七九九回)

八月一九日(水) 正宗寺本堂

出席者 三二名

講演「久万山の人たちと柳原極堂」梅木順子追慕

理事 二神 将氏

極堂の父正義の妹満喜が、久万山の庄屋梅木源平に嫁いだ関係で、久万山の人たちと極堂との交流は深い。三男の脩吉は、中学校の学友で、子規、脩吉、極堂ほか二人が、中学時代に撮つ

た写真が残されている。脩吉と同じ久万山の庄屋小倉家の養子になったのち、高知県本山で、キリスト教の布教師となつてしたが、吉野川で事故により水死した。極堂はその一周忌に海南新聞に追悼の記事を書いた。脩吉の妹順子は、極堂の久万山での政治演説を、手厳しく批評するほどの親しい仲であった。極堂は人格教養ともに優れた女性として、敬愛していた。彼女は結婚後間もなく二一歳で亡くなったが、その一周忌に極堂は、海南新聞の一面中央に追悼文を掲載するという異例の扱いで、その夭折を悼んだ。

○平成二一年九月例会(第八〇〇回)

九月一九日(土) 正宗寺本堂

出席者 五五名

講演「松山発『子規事典』を子規居士に捧げたい」

本会常任理事 今村 威氏

現在松山子規会で編纂中の、『松山発子規事典』(仮称)の意義と内容について述べられた。(本号に掲載)

卓話「松山子規会創立当時をふり返って」

本会常任理事 宇和 宣氏

本年九月で、八〇〇回例会を迎えた松山子規会の創立当時の事情を、第一回例会などの資料に基づいて、詳述された。(本号に掲載)

卓話「子規新資料について」

本会副会長 和田 克司氏

伊藤松子宛子規書簡十八通など。

(本号に掲載)

第一〇八回 子規忌並びに物故会員法要

墓前祭 子規埋髪塔前
 本法要 正宗寺本堂

法要読経 正宗寺法務統括住職
 献詠披露 司会 常任理事
 焼香 遺族代表 田中 宣氏
 森 慎吾氏
 佐伯 徹也氏
 役員 有志 井手 康夫氏
 会長

献詠

畏みて修学三期子規祀る
 子規語らん外つ国へ発つ瀬祭忌
 糸瓜忌や高張提灯掲げては
 子規の忌や一朵の雲が坂の上
 数珠玉や菩提の寺に子規の句碑
 子規まつる墓地に叔父も眠るかな
 子規忌きて風さやかなり旅仕度
 城山の夕日に子規は何思ふ
 鶏頭花心に燃ゆる火のごとく
 紫の桔梗古りけり瀬祭忌
 草花を摘みつゝ詣る瀬祭忌
 さやけしや糸瓜に夜々の月の光
 天高くかくもしづけき子規忌かな
 子規の里山頭火ゆきて七十年

乾 燕子
 乃万美奈子
 宇高 孝子
 小西 昭夫
 才上 宏子
 土居けいこ
 白石 允枝
 小澤真奈美
 田中 紫春
 西本 加代
 山岡 麦舟
 和田 数子
 仙波 希佐
 堀口文人きどり

へちま忌のあんぱんふくら焼けてをり
 のぼる様柿も高価になりました
 一行詩粗製濫造瀬祭忌
 肥えてゆく月や子規忌でありにけり
 動かない雲を見ている瀬祭忌
 久方のなもし言葉や子規祀る
 子規の忌や電気ケトルがまた沸いて
 オフィスより海を見てをり瀬祭忌
 旅人となりたる一日瀬祭忌
 のぼさんの遊びし町にへちま伸ぶ
 子規庵のへちまに会ひし旅のこと
 子規も見しターナー島の松青し

子規忌法要供物御礼

御供料 内藤世南 四女
 御供料
 温泉前餅
 お菓子
 供華一对
 清酒瀬祭
 鶏頭・糸瓜
 梨・柿・みかん
 鶏頭・糸瓜
 四本和佳子様
 泉 寔様
 玉 泉 堂様
 竹田 美喜様
 村田葬儀社様
 宇和 宣様
 和田カズ子様
 浅海 好美様
 風本 幸子様

岩崎 美世
 佐伯のおこ
 伊藤 海子
 岡本 亜蘇
 東 英幸
 浅海 好美
 三好 万美
 松本 秀一
 河野けいこ
 本郷 和子
 乾 歌子
 池田さち子

松山子規会例会八〇〇回を迎えて

会長 井手 康 夫

平成二十一年九月十九日は、第一〇八回子規忌並びに物故会員の法要の日であると共に、松山子規会例会八〇〇回という記念すべき日でもありご同慶のいたりであります。

現在、松山子規会の例会場は、正月を除いて毎月正宗寺に定着しております。

しかしながら、創立当初は、会場も度々変更したり、会員も四、五人しか集らなかつたり役員間の意思疎通に欠けることなどもあつたようです。にも拘らず、例会八〇〇回という輝かしい誇るべき日を迎えられたということは、先輩たちが「正岡子規が不滅である限り、松山子規会もまた不滅であらねばならぬ」という確固たる信念と烈々たる熱情を継承された賜物であると思います。

現在の松山子規会も、これら先輩の心を心として、和田克司副会長を編集委員長とする「松山発子規事典」の編集という大事業に取り組んでおります。

平成十八年六月十五日の第一回編集委員会を皮切りに、毎月例会後に場所を変えて編集委員会を開き、各編集委員が一月間の調査研究結果を発表し合つて論議を深めております。

会員の皆様にも、明治時代の松山に関する資料、とりわけ写真等のご提供や、和田編集委員長が例会の都度お願いしている地方の祭りごと、風習、方言等に関する情報提供については是非ご協力下さいますようお願い致します。

『松山発子規事典』（仮題）を子規居士に捧げたい

常任理事 今村 威

わが松山子規会は、昭和一八（一九四三）年一月一九日に設立されました。その第一回例会から数えて、本日第八〇〇回例会を迎えることとなりました。まことにおめでとう存じます。子規顕彰に生涯を捧げられ、本会設立の提唱者でもあられる柳原極堂翁、初代会長菅菊太郎氏をはじめとする歴代の会長諸氏を中心に、今日まで本会の発展に寄与されました先輩の方々に、心から感謝の誠を捧げます。そして、諸先輩のご労苦にお応えすべく、私ども現会員一同が、一つの決心を致し、その実現に努めておりますことを申し上げたいと存じます。

伊予愛媛の文化を、千年という時間で振り返るとき、それが、日本の文化を豊かなものにしていく上で、大きな貢献をしていることに、気付かないではいられませぬ。

六世紀も終わりの西暦五九六年、聖徳太子がこの地に来られ、「ここ伊予では、太陽や月が、分け隔てなくすべてのものを照らすように、また温泉が、すべての人の病を等しく癒すように、平等の政治が行われているので、万民はそれを心から仰いでいる」というメッセージを残しています。

このメッセージの全文は、本会第二代会長景浦稚桃氏の筆による碑文として、椿湯の前に建てられています。太子のこの体験が八年後、仏教の平等思想を根本においた政治を実現するための憲法一七条へと発展したと思われます。

それからおよそ六〇〇年後の一二三九年、道後の地に、一遍上人が生まれました。子規は一遍を、「伊予第一の豪傑」と呼んでいます。一遍は、北は奥州の江刺から、南は九州の大隅まで、諸国を歩いて「南無阿弥陀仏必定往生六十万」と書かれた念仏札を配り、踊念仏によつて「すべての人は救われる」と説き、衆生を済度しました。この絶対平等の精神から出た「松は松、竹は竹というように、人間それぞれが、もつて生まれた特性を生かして生きることこそ大切だ」という一遍の教えが、中世に、阿弥衆、同朋衆といった各種プロ集団を生み、能、連歌、生け花、造園など日本独特の文化を、生み出すきっかけとなりました。中世以降、これまで文化の創造者であった貴族や知識階級に替わつて、庶民が文化の担い手となりました。

一遍からおおよそ六〇〇年後の一八六七年、同じ松山に正

岡子規が生まれています。子規は皆さんご存知のように、近代短歌俳句の革新、「仰臥漫録」「病牀六尺」と言った優れた随筆作品を通して、写生文という近代にふさわしい文体を創造しました。

短歌の革新では、十回にわたって新聞『日本』に発表した「歌よみに与ふる書」によって、既成の権威におもねらず、「子規選集」「子規の短歌革新」の編者島田修二氏の言葉を借りますと、「一人一人の文学の自立」を促しています。そして優れた批評眼を駆使した評論によって、源実朝、田安宗武、橘曙覧、平賀元義といった埋もれていた中世近世の優れた歌人を世に知らしめたのであります。

俳句の革新では、まず、およそ九〇〇の俳書から、古今の俳句作品を書き集め、これを分類するという科学的手法によって、豊富かつ緻密なデータバンクを作り、これを根拠に、論陣を張りました。分類の種類は、四季別に分類した甲号、事物別に分類した乙号、形式的並びに実質的分类の丙号、句調などによる分類の丁号がありますが、最も子規の俳句革新に役立ったのは、時代順、俳人別に分類した『俳家全集』であったと思います。『俳家全集』は、これまでに個人の全集が作られていた芭蕉と其角を除く、一三三人の俳人の作品を、個人別に分類したもので、約二万二千五百句が収められています。この分類を通して子規は、わずかに一七音の短詩形の作品にも、時代性と個性が表現されていることを確信します。この確信が、明治二八年に書かれて、

俳句革新運動の拠り所となった「俳諧大要」の第一「俳句の標準」の冒頭に記された「俳句は文学の一部なり」の宣言となったのです。子規の「月並俳句の否定」は、個性尊重の精神から出たものであります。一遍が平等の精神から説いた「松は松、竹は竹というように、人間それぞれが、もって生まれた特性を生かして生きることこそ大切だ」という教えと一致しています。「子規が」「初めは非風、飄亭、古白等に学んだ。鳴雪に学んだこともある。それから後になつては碧梧桐や虚子に学んだ」と、こういうことを云ったことがある」という高浜虚子の証言からも、子規が平等の精神を貫いていたことは明らかです。

子規をこよなく敬愛した司馬遼太郎氏が「だが、どんな目で書くのにも用いることが出来る文体」と評した「写生文」という文体の創造にも、この平等の精神が生かされました。子規は雑誌『ホトトギス』で、写生文による日記を募集します。そして全国から応募した人々の優れた作品から学びながら、普遍性のある写生文を創造しています。勿論子規を育てたのは、故郷の松山だけではありません。病床にある子規の生活を保障し、活躍の場を与えてくれた陸羯南がいなければ、子規の文学活動は成り立たなかったことは明らかですし、同じ短歌革新を志した与謝野鉄幹や、根岸の子規庵に集う歌人俳人たち、さらに夏目漱石、森鷗外といった文学者たちとの切磋琢磨が、子規を大きく成長させたことは言うまでもありません。しかしながら、故郷

伊予松山に脈々と流れている平等の精神が、子規の文学形成に大きくかかわっていることも、申し上げたいのです。

こうしておよそ六〇〇年の周期で、伊予愛媛の文化が、日本全体の文化に大きくかかわっている歴史を見て参りましたが、その間伊予愛媛の人々が、何もしなかつたというわけはありません。一遍以後、中世から近世初期にかけて、道後湯築城の河野家の武士たちや、宝厳寺の時宗の僧のほか、杜家や時衆の人々、一般庶民たちが参加して巻いた連歌二八二帖からなる「大山祇神社連歌」は、国指定重要文化財になっています。また、子規のおよそ百年前、松山で活躍した俳人栗田樗堂は、地方に拠点をおいて活動しながら、当時の全国俳人ベストテンの一人に入れられています。彼を慕って小林一茶が二度も松山を訪れていますが、当時ほとんど無名に近かつた一茶を、対等にもてなしたばかりか、一茶の優れたところを、逆に学んでいるという、子規とよく似た平等心からの交流をしています。

さて、子規の偉大な業績を記念して、すでに四種類の全集、近くは増進会出版社から立派な『子規選集』も出版されています。それにもかかわらず、子規の事典が、いまだに編まれていないのは、子規を敬愛するわれわれにとりまして、誠に遺憾なことであります。あるいは子規の文学と人となり、あまりにも大きく、深いからであるからかも知れません。また、子規の偉大な業績が存在する以上、いつかは中央で、子規研究の専門家たちによって、『子規事

典』が編纂されるでありましょう。しかしそれまで待つていられない事情があります。

有名な中村草田男の句「降る雪や明治は遠くなりけり」が発表されたのは、『ホトトギス』昭和六年三月号ですが、それからでも、すでに七八年の時が過ぎていきます。子規の活躍した明治は、いつそう遠くなっています。いまわれわれが記録しておかなければ、永遠に記憶から消え去つてしまふ事柄があるのではないか。そのような動機から、この度松山子規会では、勇気を奮つて、松山でなければ編集できない内容の事典を目指して、『松山発正岡子規事典』（仮題）を編纂することにしました。

子規は故郷松山のことを、明治二八（一八九五）年に書かれた『養痾雑記』の「故郷」と題する随筆で、「世に故郷程こひしきはあらじ。花にも月にも喜びにも悲しみにも先づ思ひ出でらるるは故郷なり。（中略）母親の乳房と故郷の土とははなれうきものなめり。」と述べています。この子規の思いが、全国の人々に、少しでも汲み取つていただけるような事典にしたいと念願しています。

まずこれまでの経過から申し上げます。平成一八年四月の総会に、『松山発正岡子規事典』編纂を提案し、満場一致で可決されました。それを受けて、その年の六月一五日、第一回の編集委員会を開催しました。現在一五名の編集委員が、お互いに協力しながら執筆中ですが、編集長は、本会副会長の和田克司氏がお引受け下さいました。和

田克司氏は、子規研究の第一人者であられた和田茂樹前松山子規协会会长のご子息で、お父様の全業績を引き継がれてゐるばかりでなく、それをいっそう深めて、今や子規研究の最前線で活躍しておられます。私も編集委員にとりまして、まことに心強いかぎりであります。

一口に『松山発子規事典』と申しましても、あまりにも膨大かつ複雑で、何処から手を付けてよいやら、途方に暮れるといった有様でありました。何か突破口はないかと思案いたしました。子規と松山との関係が、最も明らかな作品である『散策集』の注釈から始めてみようということになりました。『散策集』は、皆さんご存知のように、明治二八年子規が、神戸の大患から小康を得まして、松山に帰省し、折りよく愛媛県尋常中学校に赴任してました。夏目漱石の下宿「愚陀仏庵」に同宿してました折、おそらくこれが故郷の見納めという思いもあつたのでしよう、また、松山松風会の人たちに、写生俳句の何たるかを教えようという気概もあつたのでしよう、実に意欲的に松山の各所を散策し、たくさんの俳句を交えた素晴らしい紀行作品を書いていきます。

『散策集』の注釈につきましては、既に松山市民叢書『散策集』があり、さらに子規記念博物館友の会が、神野昭氏を中心に作成されました詳しいガイドブックがあります。これらの参考文献をもとに、さらに徹底した調査を試みました。子規の散策したコースは、五つあります。

① 九月二〇日午後、極堂を同伴した石手・道後コース
② 九月二一日午後、愛松、極堂、梅屋を同伴した城北コース

ス
③ 一〇月二日子規一人で散策した中の川、石手川堤コース

ス
④ 一〇月六日漱石と遊んだ道後湯之町コース

ス
⑤ 一〇月七日子規一人霽月を訪ねた雄郡、余戸、今出コース

それにいたがままで、編集委員を五つのグループに分けて、研究を進めました。まず子規が歩いた道はどうであつたかということでありますが、当時と道路事情が大きく変わっておりますので、困りました。しかし幸いなことに、明治二二年松山二連隊が測量した二万分の一の地図があり、これと現行の国土地理院作成の二万五千分の一の地形図を照合することができまして、もう失われてしまった当時の道もありましたが、かなり確定的に子規のコースを特定できました。

調査の結果得られたものを、詳しく申し上げますと、それぞれのコースにつきまして、一時間以上を要することになりますし、すでに『子規会誌』一一三号、一一五号、一一七号、一一八号、一二〇号に発表しておりますので、本日は、それぞれについて、一つ二つずつご紹介申し上げます。

石手、道後コースでは、一日に四五句の俳句を詠んでおり、同行の極堂（当時は碌堂）に、写生俳句を教えたい子

規の気持が感じられます。その中の一句

稲の香に人居らずなりぬ避病院

松山では、明治二二年以降度々伝染病が発生し、死者も多かったこと、特に『散策集』が書かれた前年の明治二七年には、松山近郊の村々は、早魃と赤痢の大流行で、悲惨な状態にあったのが、二八年には早魃も赤痢も治まり、やつと平和な農村に戻ってきた、そういう安堵感が、この句に反映されていると見る事ができます。

また、子規が石手寺から道後へたどった道は、石手寺から子規記念博物館に通じ、市街地へ抜ける現在の県道はまだまだなく、旧遍路道を歩いたのですが、所々に現存する遍路道案内の石柱によって、一部現存していることが知られます。

城北コースでは、散文は冒頭だけで、後は俳句二四句です。その四句目は、「常楽寺二句」と前書きして、

狸死に狐留守なり秋の風

という、淋しげで滑稽味のある句です。常楽寺は、一般に六角堂と呼ばれ、入口には大きな赤い鳥居が建てられています。正式には稻荷山六角堂常楽寺といい、神仏混交の霊域です。今井法如住職兼主管のお話では、「明治時代には、道路に面して、お稻荷さんと榎大明神のお堂が並んで建っていた。六角堂の八又榎大明神と松山市役所前のお榎さんつまり『お袖大明神』は夫婦である」ということで、子規はこうした松山の民話を踏まえて、この句を詠んだもので

しよう。

中の川、石手川堤コースは、子規の鼻血と雨続きがようやく止んで、久々の散策となりました。「郊外に出でんとて、中の川を渡り八軒家を過ぎ、汽車道に添ふて石手川の土手に上る」とある「八軒家」の地名は、今はありませんが、聞き取り調査の結果、当時蓮福寺の角を南に入り、汽車道（伊予鉄道横河原線）に出るまでの道の呼び名であったようです。現在の道筋では、徳本家具店から南に入る道であります。「瀧の観音」も聞き取りの結果、そのお堂のもとあった位置は、現在の泉町二三の三、四で、観音像はひよんの木のある葉師寺に安置されていることも分かりました。また、「浦屋先生村居の前を過ぎりて」の村居は、明治一八年に宇都宮丹靖の記した詳細な地図をもとに計算した結果、池約二〇〇坪、建物約一〇〇坪、庭園と叢林約三〇〇坪、計約六〇〇坪（一九八〇平方メートル）の広大な住まいであることも判明しました。

漱石と遊んだ道後コースでは、

黄檗の山門深き芭蕉かな

の「黄檗の山門」とは、鷲谷墓地登り口の右手一帯、現在ホテル椿館のあたりにあった大禅寺（宇治黄檗宗萬福寺の末寺）のことです。今は跡形もありませんが、子規、漱石が訪れた当時は、本堂や観音堂、それに桜の大樹がありました。

「しる人の墓を尋ねけるに、四、五年の月日は北邸きたての山墳

墓を増してつひに見あたらす」の知る人とは、幼少の子規をかわいがつてくれた小島久（曾祖父常武の後妻）のこと、明治二年五月二十九日に亡くなりました。「北邸の山」は、皇帝や貴人の墓の多い中国洛陽市北の山の名で、ここでは鷲谷墓地を指します。明治四年八月、松山市の共同墓地になり、埋葬が増加したことが背景にあります。

『散策集』には書かれていませんが、この日子規と漱石は、鉄道を利用して道後に行っています。その鉄道について、『事典』の原稿を見ますと、

道後鉄道 明治二八年八月二二日開業。道後温泉の入浴客の便利のため、村瀬正親、伊佐庭如矢、鮎田市蔵などの有志が計画して、松山市とを結ぶ道後——一番町、道後——三津口の二線を設けた。布設趣意書によると「他府県人は勿論外国人の来浴するもの年を追うて増加す。」とあり、「老少入浴の便」とともに「外人に対する観光を助け貨物運輸の便利を開く」とある。

道後鉄道の松山駅は、現在の一歩町駅よりやや東寄りであり、松山市街の東の入り口であった。三津口駅は、既に明治二一年に開業していた伊予鉄道の古町駅と道路をへだてて連絡をした。

この年四月より夏目金之助（漱石）は、松山中学の英語教師として着任。正岡子規は、神戸の須磨で療養の後、道後鉄道開業直後の八月二十五日に松山へ帰り、二七日からは、漱石の愚陀仏庵に入り同居した。子規

の『散策集』によると二人は十月六日（日曜日）に、一番町から道後鉄道に乗り、道後温泉周辺を散策している。（以下略）

道後鉄道は、現在の松山の人たちから忘れられてしまった存在ですが、これを敷設した当時の道後の人たちの意気込みが感じられます。三層楼の本館は、その前年に完成しています。

最後の雄郡、余戸、今出コースについて、新しい発見は、①子規が訪ねた当時の正宗寺の面影を残す、中島菜刀画く「正宗寺全図」（昭和三年三月）が見つかった。

②雄群神社拜殿に、万延二年の絵馬があり、雄群神社、今はなき御旅所の松や土居田の社の全容がわかった。

③甘藷を積んだ中島船は、今出の港（唐樋）ではなく、今出集落ほほ南あたりの重信川河口に着けていた（このことにより、今出で詠んだ俳句は、たどった順に並べられていることが判明した）。

④「救寺」は露月邸裏の常光寺、「山城」は三津の忽那山である。（③④は本会理事三由孝太郎氏の教示）。

以上のように、『散策集』注釈の作業を通して、私どもが得た結論は、作品に登場した地名や人名、事柄だけでなく、片付けられるものではなく、松山の歴史や文化全体にかかわる幅広い内容になるであろうということです。つまり、「子規を通して明治の松山を、明治の松山を通して子規を理解するための事典」にしなければならぬであろう

ということでした。ささやかな研究にもかかわらず、新しい発見があったことにも、私どもは勇気づけられました。

ここで、『散策集』のほかに、松山にかかわる子規の作品や事項の主なものを、挙げてみましょう。

1 『俳諧大要』は、講談社版『子規全集』第四卷「俳論俳話」の三四二ページから四一四ページまで、七二ページにわたる子規の代表的俳論です。最初新聞「日本」に二七回にわたって連載され、後にほと、ぎす発行所から単行本で刊行されています。「日本」に第一回が掲載されたのは、明治二八年一〇月二二日です。この時子規は、松山から東京への帰途にあり、大阪にいました。このことでも分かるように、『俳諧大要』の原稿は、松山で書かれているのです。子規は東京から取り寄せた『俳家全集』（俳句の時代別俳人別分類）を手がかりに、連日愚陀仏庵に集まってくる松山松風会のメンバーたちを相手に、俳句論を展開し、その質疑応答によって磨き上げられたものを、まとめあげたものと言えるでしょう。その中に常々文学論を戦わせていた畏友夏目漱石がいたのは、子規にとつて大きな刺激になったものと思われれます。内容は具体的で、論も煮詰められています。『俳諧大要』は「日本」に掲載された後、松山の「海南新聞」にも転載されています。これを単行本として刊行した高浜虚子は序文に「極堂等松風会諸氏朝暮出入して俳を論じ句を闘す。時に明治二十八年秋俳諧大要は当時に成るものにして……」と記しています。松山の分け隔てない

平等の雰囲気の中で、生み出された俳論で、子規俳句革新の基礎となりました。日清戦争の従軍記者となり、その帰国途上、大病に罹り、一時は死を覚悟する程であった子規が、ようやく命拾いをして、故郷の友たちに支えられ、再び俳句革新に意欲を燃やすきっかけとなった作品であります。

『松山発子規事典』の『俳諧大要』の原稿の最後の部分を紹介しましょう。子規が俳句の修学を、三期に分けて段階的に論じている部分の解説です。

修学第一期では、「古池や蛙飛び込む水の音」の句解をはじめ三十数句を説き、例句を挙げて新鮮な見解を示し、修学第二期では、多作とともに、壮大雄渾と繊細精緻、雅樸と婉麗と対比させた後に、理屈を避けるべきを説き、俳句史を記述し、趣向、言語、句調、避けるべきたるみを説く。具体的には、空想と写実とを対比させながら、名所旧跡にいたり、新意匠、滑稽、技法について説明し、蕪村の句など数句の句解を展開する。修学第三期では、さらに進んで、文学専門への道を示し、俳句の陳腐と新奇とを知り、空想、写実の合一化による大文学、更なる探究への道を示している。

2 『筆まかせ』の「東京松山対比一覽」

明治二二年東京が東京市になったのに続いて、明治二二年に松山も松山市となりました。こうした時代背景もあって、子規は、明治二二年一二月上野の無極庵で催された「松

「山会」の席上、この「東京松山対比一覽」を発表して、好評を得ました。初めからその規模において、東京にはかなわないのは承知の上で、敢えて松山を比較してみるところに、子規のユーモアと、地方人としての誇りと郷土愛が感じられます。上京して六年半の歳月を経ているとはいえ、六八項目にもわたって、大東京と地方都市松山を対比できるところから、子規の旺盛な好奇心と、ジャーナリストとしての資質がうかがえます。まだほんの一部しか出来上がっていませんが、その原稿の一部をご紹介します。

8 帝国大学 松山師範学校

帝国大学 東京市本郷にある国立大学。江戸幕府直轄の開成校と医学所に始まる。明治一〇（一八七七）年開成校の後身開成学校と医学校の後身の東京医学校とを統合して東京大学創立。同一九年帝国大学、同三〇年東京帝国大学と改称。

松山師範学校 明治九年八月二日に、愛媛師範学校が松山市二番町に設立された。明治一九年には、愛媛県尋常師範学校と改称され、定員は二〇〇名であった。（高須賀康生著『愛媛の学校事始』より）

帝国大学と松山師範学校との対比は、あまりにも違いすぎるようにも思われるが、当時の松山では、中学校よりも師範学校の方が上に評価されていた。師範学校が、教育者の最高学府として位置していた点を重視したものと思われる。後年教育者となることを夢見た子規らしい発

想といえる。

64 東京日々新聞 海南新聞

東京日々新聞 東京における最初の日刊新聞で、現在の「毎日新聞」東京本社の前身にあたる。一八七二年（明治五）二月に創刊された。七四年末に入社した福地桜痴が社説欄を創設、政府御用新聞としての立場を鮮明に打ち出し、自由民権派の政論新聞に對抗して健筆を揮った。（平凡社『大百科事典』より）

海南新聞 愛媛県内最初の日刊新聞。「愛媛新聞」の前身三社のうちの二紙。明治九年（一八七六）に県内新聞第一号として創刊された。「本県御用愛媛新聞」が経営困難となり、同一〇年四月二八日から「海南新聞」と改題、日刊紙としてスタートした。紙型も和本つづりから四ページ一枚刷りにし、現代の新聞のような装いに変えた。初代編集長は、論客として名があった西河通徹だった。経営難は続き、同一一年には本県自由党の前身公共社の機関紙となり、一五年には株式会社で改組した。（『愛媛県大事典』より）

子規の初期論文に、「海南新聞ノ発兌ヲ賀ス」（明治一六年・講談社版『子規全集』第九卷「初期文集」）がある。

ともに最初の日刊新聞であり、御用新聞の性格をもっていたことによる。

六八組の組み合わせの中には、当時の東京の状況を知ら

なければ、説明できないものが多く、困っていたのですが、明治十三年に『東京百事便』という本が出版されています、その復刻版が松山大学図書館にあることが分かり、お願いして閲覧できることになりました、ほっとしています。

3 『仰臥漫録』 子規の随筆には『筆まかせ』の外にも、故郷について述べたものが少なくありません。例えば、『仰臥漫録』明治三四年九月二日の記事に、

松山木屋町法界寺ノ鱒施餓鬼トハ道端ニ鱒汁商フ者出ルナリト 母ナドモ幼キ時祖父ドノニツラレ弁当持テ往テ其川端ニテ食ハレタリト 尤旧曆廿六日頃ノ闇ノ夜ノ事ナリトイフ

餓鬼モ食ヘ闇ノ夜中ノ鱒汁

とあります。しかしながら今日の木屋町には、法界寺も、鱒施餓鬼の行事も残っていません。『事典』の原稿です。

法界寺 和気郡御幸村。大川の南側の現在の木屋町四、五丁目は、御幸村新宅町といった。木屋町三丁目と四丁目との境の、蓋をされた小川が、和気郡と温泉郡の境である。(中略)旧法界寺の角に「南御城下町右太山寺へ入る道」の石標がある。

鱒施餓鬼 法界寺は、地蔵の盆行事の終わった後の八月二十三、二十四日に行われる鱒施餓鬼で知られ、江戸時代から明治の初期にかけて賑わった。(山本富次郎・ふるさと歳時記)

これらのことから、『子規事典』には、明治六年頃の「松

山城下とその周辺の町村別寺社一覽」を付けることとし、さらに正月、節句、お盆、七夕など、松山の民間行事の調査も含めることにしました。

4 方言 今から半世紀以上昔のことですが、ある旅行雑誌の記事に、「松山城の堀に、『この池の魚釣られません松山市』という立て札が立ててある。『この池には、あなたに釣られるような間抜けた魚はいません』というのである。『松山市』とあるからには、立派な公文書である。公文書にこのようなユーモアを用いるとは、さすが『坊っちゃん』の舞台となった町だけのことはある」と書いてありました。松山の人であれば、これが大きな誤解であることは、すぐ分かりますが、方言は他郷の人たちには、難しいものです。子規が、有名な「月給四十円」で結んだ墓碑銘を送った明治三二年七月一三日付け河東銚宛の書簡の最後にも、「但シコレハ人ニ見セラレン」とあります。「る」「らる」という可能の助動詞に否定の語を付けると、柔らかな禁止の意味になります。この古典的で上品な語法を、今理解する人は、全国的には少ないでしょう。子規の小説『曼珠沙華』には、松山の方言がたくさんでてきます。随筆や紀行文にも方言が使われています。「松山言葉四十句」という作品もあります。『子規事典』には、簡便な「松山方言辞典」も必要です。これには、松山出身の国語学者岡野久胤氏が、昭和一三年に出版した『伊予松山方言集』が、強い味方です。子規の紀行『しゃくられの記』の「しゃくる」を、『伊予松

山方言集』で引いてみますと、「ヒツタクル。強く急に手繰る。」と出ていました。

5 人名 松山松風会のメンバーをはじめ、子規にかかわる郷土の人たちは、ざっと数えても、およそ二五〇人に及びます。これらの人たちの事績も、記録紹介しなければなりません。その原稿の一つを紹介します。

浦屋雲林 本名は寛制、通称は登蔵、号は雲林。子規の

漢詩の師。天保十一年（一八四〇）七月一日生まれ。

出生地は未詳。明治三十一年（一八九八）一〇月一五日

歿、享年五九歳。墓所は松山市朝日ヶ丘二丁目の宝塔

寺。（中略）明治維新後は、温泉郡藤原村（現松山市）

に私塾桃源齋を開いて子弟の教育に当たり、主として

漢籍の教授に努めた。（中略）雲林の人物像について、

虚子によれば、「この浦屋といふ漢学の先生は、よほど

子規の興味を惹いた先生であつたやうに思ふ。破れた

袴、古びた帽を着けて歩いてをられる茫漠たる相貌に

は、時折私も接したことがある。厳格な態度で素読な

どを教へられるのであらうけれども、世事にはきわめ

て疎い老儒であつたことと思はれる。『漢詩稿』（講談

社版『子規全集』第八卷「漢詩新體詩」）では、子規作

の漢詩に対して、雲林先生の懇切な評言が記録されて

おり、明治一四年には七回、一五年には三回、二三年

には九回、計一九回に及んでいる。

（以下略）
この中の虚子の証言には、雲林先生の風貌を彷彿させる

ものがあり、うれしい限りであります。

このほかに取り上げなければならぬ子規の作品には、故郷を詠んだ漢詩、和歌、俳句があり、その注釈だけでなく、その中に詠み込まれた地名、行事、料理などについても、触れなければなりません。例えば、子規の俳句

寒梅や的場あたりは田舎めく（明治二五年）

の「的場」は、全く不明であつたのですが、伊予史談会の袖山俊夫氏のご教示により、「旧藤原村の小字で、現在の松山市永代町、真砂町付近。子規の生家には極めて近く、正宗寺の西より、南西部にあたり、市街区と村分との境に位置し、昔御花畑と呼ばれていた所」ということが分かりました。

子規はこよなく故郷松山を愛していただけに、『松山発子規事典』で取り上げなければならない事項は、編集委員一同途方に暮れるほど、多様であり、多量であります。完成を目指して、一つ一つ明らかにして参りたいと存じます。今日もこの「子規忌」の諸行事が終わりました後、第二九回目の編集委員会が開かれます。全国の人々に、松山の平等思想が育んだ子規居士への正しい理解を、一層深めてもらうために、努めたいと思います。松山子規会会員のみなさん、広く市民の方々のご協力ご教示を、心よりお願い申し上げます。

（九月例会講演）

卓話 松山子規会創立当時をふり返って

常任理事 宇和 宣

松山子規会は昭和十八年の一月十九日、創立、発会いたしました。今から数えて六十六年九ヶ月前になります。昭和二十年七月二十六日、あと二十日で終戦という時に、B29の大空襲を受けて松山は焼野原になりました。そのため翌八月の例会を一回休んだだけで、本日第一〇八回の子規忌をもって丁度八〇〇回目の例会を迎えました。区切りの良いところで一度子規会の創立時代をふり返ってみたいと思います。今日のお話のために資料を六点用意いたしました。①創立懐古、これは昭和十八年に子規会が発足した時、柳原極堂が書いた創立趣意書と正堂、曾我鍛の筆になる会則、又当日出席した五十九名の会員の自筆署名を復刻して、第七〇回の子規忌（昭和四十六年）に出席した会員に進呈したものを、今回再度復刻してお渡しするものです。②表紙をあけたところに歴代の子規会会長さんの一覧表を入れておきました。③三つ目は子規遺芳という本の一部分のコピーです。この本は「松山子規会史」と副題がついているように、子規会双書として発行され例会記録などが紹介さ

れています。現在事務局に在庫はありません。④子規会誌の創刊第一号の一部分のコピーです。この一ページに当時会長であった越智二良先生の「松山子規会三十七年の歩み」という創刊のご挨拶が掲載されていますが、これを読むと創立の苦難の時代、発展の経過がよくわかります。これも在庫なし。⑤四番目の資料の二枚目にはさんであるのは、昭和二十七年当時の子規会報のコピーです。現在のようない「子規会誌」は、お手許にあるように昭和五十四年四月に創刊されたもので、それまではこのようなものであったようです。以上の資料をもとに、時間の許す範囲でお話してみたいと思います。

まずお手許の資料、「創立懐古」をご覧ください。この冊子は、第七十回子規忌（昭和四十六年九月十九日）に出席された皆さんに、子規会発会の時に極堂が書いた設立趣意をしたためた「はしがき」正堂、曾我鍛の書いた会則全文、又当日出席した全員の自筆署名を小冊子に復刻して、記念品として進呈したものです。表紙を一枚めくったところに

書かれてある文章を読んでみます。

昭和十八年一月、松山子規会発会の当初会員名簿の巻頭に柳原極堂翁が筆を執つて創立趣意をしたためた「はしがき」会則全文は正堂曾我鍛氏の筆、また名簿は同月十九日発会当日出席した会員の自署である。今秋子規七十回忌を記念し、原本を複製して会員に頒つ。

昭和四十六年九月十九日 松山子規会

とあります。本日、松山子規会例会八〇〇回を記念いたしましたので再度復刻いたしました皆さんに進呈いたします。皆さんの中にも持つておられる方がいらつしやると思います。私は前会長の浦屋さんから頂いて大事にしております。実は八月の例会で二神さんが「柳原極堂と久万山の人たち」というテーマで講演された時にこの「創立懐古」を皆さんに渡される用意をしておられたのです。

それを見て私が「九月の卓話で子規会創立当時の話をしようと思つています。創立懐古もこれから作ろうと思つていたところですよ」と言つたら、「これを使いなさい。上げるから」と言つて折角用意していたものをそっくり下さいました。

少し数が足りないので増刷しましたが手間がかかつて大変でした。改めてお礼申し上げます。

これを読んでみますと、極堂が設立の主旨を達筆で書いてあり、これが松山子規会の精神でもあるところから、一

度読んでみます。

二枚目を開けて下さい。達筆すぎて読めない方は、「子規遺芳」の八ページを開けて下さい。下の段の中ほどに「はしがき」とあります。少し長いですが読んでみます。

お手許の資料を読んで下さい。

二番目の資料は、歴代の会長さんのお名前と簡単な在任期間ですから、特に説明を加える必要はないと思いますので、三番目の資料に移ります。これは「子規遺芳」の本の一部をコピーしたものです。昭和十八年に発会して四十年間の間に社会も大きく変わり、子規会もそれにつれて変遷をくり返して来ました。特に毎月の例会とか、会員の貴重な研究の成果の記録の散逸を恐れて、松山子規会叢書の第十五集として「松山子規会史(1)」の副題で昭和五十九年に発行いたしております。

この本を持つておられる方は多いと思いますが、残念ながらこの本は絶版となり在庫はありません。

第一回から第四〇七回までの例会記録などが集録されています。(昭和十八年〜五十一年)それとこの本の冒頭には創立当時の記録が詳しくのつております。四・五・六枚目を後で見えて下さい。

余談ながら申し上げますが、この「子規遺芳」の姉妹編として出版されたのが、松山子規会例会講演集の「子規敬慕」であります。

この本は、子規会創立四十五周年を記念して、先ほど申し上げた「子規遺芳」の続き、第四〇八回の例会から第四三〇回までの主として講演を中心に集録されたものです。

この本はまだ三十冊余り在庫がありますので、ご希望の方は私まで仰言って下されば送ります。四番目の資料は「子規会誌」創刊第一号の一部分をコピーしたものです。

これまで子規会の例会の講演や連絡事項などは、発会当時はハガキでガリ版刷りで「子規会報」として会員に送付し、その後幹事の越智通敏先生（元県立図書館長）のご尽力で、昭和五十二年一月例会から「子規会報」を編集、発行され記録類の散逸を防がれました。

見本の会報は昭和五十三年五月二十五日号ですが、八ページ建ての堂々たるものです。

最後の行に（松山子規会報編集ならびに印刷越智通敏）と印刷されていますが、毎月発行されるのは大変だったろうと思います。

このようなご努力が実を結んで、昭和五十四年四月以降は見本のような体裁で、現在の子規会誌が発行され現在に至っています。去る七月に発行されたもので百二十二号となっており、毎号五百冊あまり発行されて国内はもとより韓国の会員、全国の主な図書館、新聞社などに送られています。創刊号の表紙をめくったところには、昭和二十七年当時のハガキの子規会報のコピー（五番目の資料）があり

ます。これは平成十九年九月に理事の高橋俊夫さんが「宇和さん、珍しいものが手に入った」と言って、持って来て下さったものです。

聞いたことはあったのですが、貴重な資料ですのでお目にかけてます。全部で十五点ほどあります。大事に保管しておきます。

この一号の二ページに越智二良先生の創刊号に寄せて「松山子規会三十七年の歩み」というご挨拶がのっています。長文ですので読めませんが、後ほど是非お目通し頂きたいと思います。

子規会第一回からの記録が、「子規遺芳」から「子規敬慕」へ、そして子規会誌一号（第四百三十一回）へとバトントッチされ、本日第八〇回を迎えたという事です。

「原点に還れ」という言葉がありますが、出発点がどうであったかを知る事も大切であると思います、お話をさせて頂きました。ご清聴ありがとうございました。

以上

（九月例会卓話）

卓話 子規新資料について

和田克司

はじめに

子規新資料の出現は、数こそ限られているものの、毎年
の如くに報告が見られ、その意義の重要性が問題とされる。
資料の公開と言う点では、本年が、子規歿後百七年、百八
回忌を迎える中で、とりわけNHKの「坂の上の雲」に誘
発された可能性がある。

大正年間以降、その存在さえ知られていなかった伊藤松
宇宛て書簡の、ほぼその全貌が明確になったのは、稀に見
る快事であった。また、未だ全貌が明確にはなっていない
が、子規の選句集「なじみ集」が、明治古典会の入札市に
出品された。長く存在のみ知られていて、内容が知られて
いなかった選句集である。新資料の面で、両資料は、甲乙
付けがたいほどの、豊富な価値と内容を有する。一見し
えた範囲内と言う限定はあるものの、先ずは、子規新資料
について、判明している範囲内でのことのみながら、その
概要につき、今後の調査、研究の基礎たるべく報告をする
ものである。

子規は、明治二十五年秋、恩師高津敏三郎の紹介で松宇
の富士百句を批評することとなり、それを機にお互いを知る
こととなり、松宇によって運座方式の句会が紹介される
や、一気に両者の関係が進展した。内藤鳴雪は「鳴雪自叙
伝」(大正十一年、増補再版、岩波文庫も)において右のご
とくに述べる。

其翌年(明治二十六年)の一月であった。子規氏が私
の宅へ来て、昨夜は非常に面白かった。それは椎の友会
と云ふへ行つて運座をやつて、遂に徹夜したとの事であ
る。そこで聞くと、椎の友会は、伊藤松宇、森猿男、片
山桃雨、石川桂山、石井得中の五氏の顔触れで、月並家
の運座には、宗匠のみが選者となるのを改めて、座中の
共選と云ふ事にして居るさうだ。而して私にも次回には
出席せぬかと勧めるので、私も直ちに承諾してそれへ出
席した。而して運座は一層面白いものだと言ふ事が判つ
た。実は以前寄宿舎仲間で俳句を作るのは、唯題位を極
めて置いて、各々勝手に句作して、それを互に批評する
と云ふ位に止まつて居た。早く多数の句を作るとを競
争してせり吟などと称へて居た。それが運座と云ふ事に

改まつて、且つ互選であると云ふ所から、各々多数の点を得るのを興味として、其運座を幾度となく催し、今度は誰れが勝つたとか負けたとか云つて愈々面白くなり、遂に徹夜をする事にもなるのである。

ここに子規と松宇との緊密な関係を示す資料として、伊藤松宇宛て新出子規自筆書簡十八通（以下「新出松宇宛て子規書簡」と略称）が一举に出現したのである。まさに、衝撃的であつた。本書簡集の閲覧、公開をご許可いただき、松山にて公表するに至つたことについては、本会会員高橋俊夫氏の全面的な助力、支援があつた。

松宇宛て書簡に限らず、新出の子規書簡が、一度に十数通も出現することは、近來その例がない。本書簡は、子規と松宇との二人が出会つた明治二十五年より、明治三十二年に至る、全二巻、各書簡九通、計十八通、各巻十メートルを越える長巻である。

「新出松宇宛て子規書簡」は、遅くとも大正七年に、伊藤松宇自身の手で、整然と二軸に表装されたものである。その全貌は、つとに、アルス版『子規全集』（大正十四年、十五年刊）で発表された。同『子規全集』の編集時には、全で十九通の松宇宛書簡が判明していた。子規が、最初に松宇に宛てた、明治二十五年十月九日書簡一通と「新出松宇宛て子規書簡」の十八通である。現今判明している、松宇宛て子規書簡は、その十九通に加えて、封筒のみ残存の一通、葉書三通、全二十三通が、講談社版『子規全集』に

収録されている。すなわち、「新出松宇宛て子規書簡」は、大正十四年に書簡の編集に活用されて以降、公開されることなく今日に至つたもので、講談社版『子規全集』編集時にも、探索が及ばなかつた資料である。まことに綺麗に保存され伝承されたもので、子規の自筆の持つ迫力が伝わる、芸術性の香り高い書簡集である。

「新出松宇宛て子規書簡」は、かくて、アルス版『子規全集』以来、すべて所収されているので、未発表書簡は存在しない。なお、甲乙二巻の書簡集のうち、乙巻末尾には、句稿が三点含まれている。従来全く知られなかつた、新資料である。第一に、明治二十六年（八月編集）の時雨の句選句稿（勝田明庵・五百木飄亭・河東可全・藤野古白・子規）、第二に、明治二十七年（一月頃か）子規、飄亭、虚子の句の子規選句稿、第三に、明治三十年（春か）の自筆自選句稿の三句稿である。

「新出松宇宛て子規書簡」を見ると、松宇、子規の人間関係を、改めて如実に知ることができる。お互いに心を許し、敬意を抱き、親近感を表わしている。明治二十八年の書簡では、大患を振り返りつつ、愚陀佛庵において、「毎日毎夜の運座連俳にて寸暇を得ず」「五十日間の運座に病余の弱体終には逆上して鼻血流出し三日間とまらぬ様な事にて」と意気込みと病状を述べ、災難に暮れたものの面白きこととして「金州、須磨、郷里、奈良にて俳句を得」たと記した、まさに生氣溢れる筆墨、明治三十年末の書簡で

は、松宇より送られた椎茸は「国風の鮓を押す」に「第一の材料」にて母堂が喜ぶことを記した、喜び溢れる筆致など、二人の温かい側面が随所に見られる。子規は、松宇より運座方式を教えられたことを感謝し、生涯に及んで、松宇を尊敬し、常に自著や、雑誌「ホトトギス」が、その逝去に至るまで送呈されたことを、松宇は述懐している（註1）。書簡の途絶えた後も、「墨汁一滴」（明治三十四年六月五日）には、子規の病床を訪ね、見舞った松宇が、蕪村の文台を示したことを伝える。二人の交誼を知ることの出来る子規晩年の記録である。

「新出松宇宛て子規書簡」を通じて、子規の書風を年代順に明瞭に一覧できるといふ、大きな特性がある。冒頭の明治二十五年の書のごとく、格式を重んじる書風にはじまり、明治二十七年以降に見られる、雄渾な書風の確立が明確である。さらに、力のこもった、明治二十八年や、氣力溢れる二十九年の書体には、確信に満ちた子規の書体を見ることが出来る。そのため「新出松宇宛て子規書簡」は、今後、年次未確定分の子規書簡の年次推定の基準資料とすることが出来る。

今後の課題として、もつとも基本的には、本文の校合に加えて、松宇宛ての各書簡の年代確定が必要である。さらに、第一に、「新出松宇宛て子規書簡」と松宇自筆の子規書簡との比較対照や、時間的な流れの配列を通じて、新

しい説明が期待される。第二に、子規の書風変遷と関わって、松山市立子規記念博物館蔵の「子規居士短冊帖」との比較精査が可能となり、子規の書風変遷が一層具体化する。第三に、新出の「なじみ集」との比較研究を通じて、松宇を中心とする椎の友の人々の研究が、一層具体化する。ここで、相互の新資料の説明が大いに進展する。

説明の点では、松宇に懇請された子規が、芭蕉二百年を機に執筆した「時雨記念序」（『子規全集』第四卷60P、第九卷332P所収）は、明治二十六年十月に執筆後、松山で発刊された「田舎文学」（全四ページ、明治二十七年二月十五日発行と伝える）に発表された。たしかに上記の記録は存在するが、現在「田舎文学」の存在が知られていない。

また「新出松宇宛て子規書簡」に付載された、第一の時雨の選句稿は、明治二十六年八月二十七日の子規書簡において「御申聞の時雨の句」「沢山な方が御所望のよし御話に候へば其ま別紙之通り差上候」と記され、現今欠如して行方の分からぬ、まさに、その「時雨記念」編集のために松宇に届けられた、時雨の句稿そのものであると思われる。

二、伊藤松宇宛ての子規書簡年月日順一覧

一覧は、①から⑨は各々の巻の所収順序を示す。年月日、整理番号と住所略記の推定とは『子規全集』による。①よ

り⑨までの番号付与のない書簡は、本巻物に存在しない。
前半二十八年までが第一巻甲巻、二十九年以降が第二巻乙巻である。

明治二十五年十月九日 214 (日本橋区浜町三丁目)

富士百句句評 部分写真あり

①明治二十五年十二月九日 232 (深川区富岡)

訪問、句会 句あり

明治二十六年一月四日 236 (日本橋区浜町一丁目)

はがき 年賀 句あり

④明治二十六年五月二十日 252 (深川区富岡)

俳諧のこと 句あり

明治二十六年五月二十七日 254 (王子村)

句会案内「同人」所収 句なし

⑤明治二十六年八月二十七日 271 (日本橋区浜町一丁目)

句会御礼 罰紙付載 句なし

②明治二十七年二月六日 287 (深川区富岡)

句会参加 句なし

⑥明治二十七年二月十日 288 (深川区富岡)

小日本購読のこと 句なし

③明治二十七年五月二十三日 302 (深川区富岡)

静岡のこと 句なし

⑦明治二十七年八月(中旬) 312 (静岡)

小日本廢刊のこと 句あり

⑧明治二十七年十二月三十一日 331 (静岡)

近況、句評のこと 句あり

⑨明治二十八年十一月上旬 404 (静岡)

東京帰着、近況、句評のこと 句あり

⑤明治二十九年三月二十四日 214 (静岡)

訪問の礼 句なし

①明治二十九年四月十二日 441 (静岡)

面白からず 興味あるべし 句あり

明治二十九年五月十一日 453 (静岡) 本文なし

②明治二十九年五月七日 456 (静岡)

大たてもの 一家を如何ともしがたく 句あり

④明治二十九年十月六日 487 (深川区富岡)

中興俳諧五傑集 句あり

⑥明治三十年四月三日 547 (静岡カ)

弁明お詫び 句なし

⑦明治三十年十二月二十三日 612 (静岡)

俳境進歩 椎の友句友近況 句あり

③明治三十一年五月十七日 655 (深川区富岡)

訪問時来客のお詫び 句あり

明治三十一年十二月四日 716 (日本橋区大伝馬町)

はがき「同人」所収 句なし

⑧明治三十二年二月十六日 739 (日本橋区大伝馬町) 中興

俳諧五傑集序原稿 句あり

⑨明治三十二年九月二十一日 781 (日本橋区大伝馬町) 句

評問合せ 句あり

本二巻の書簡集以外には、右一覽に補記したごとく、冒頭の、部分写真が残っている第一書簡一通、封筒のみ残存の一通、葉書の三通が、現在判明している。

三、明治二十七年の新選句稿

明治二十七年の子規自筆の選句稿には、子規、飄亭、虚子の句がある。

松宇先生を「王子にとふ」途中

冬木立 隠士の家の 見ゆる哉 子規

『子規全集』二巻19pには「村居を訪ふ」。

あの奥の 小さい家か 水仙花 飄亭

馬のしり 王寺稻荷の 落葉哉 虚子

右新選句稿は、二〇〇九年九月十九日毎日新聞愛媛版に、

鮮明な写真入りで掲載された。本選句稿は、子規の句が従来「村居」として「隠士」の指す雰囲気のみが理解されて

いたけれども、明確な詞書きとともに、松宇に宛てたものであることが判明した。明治二十七年五月には、松宇が勤

務の關係で、王子より静岡に赴くこと、同年八月には、飄亭が従軍記者として朝鮮半島、清国に向けて出発するため

に、本選句稿の各句は、同年一月か二月の、初めの冬の句であることが明確である。子規自身は「小日本」創刊に向

けて忙殺されていた時期であり、虚子が東上し、当初常盤会寄宿舎、やがて、子規の訓戒を受けて、子規の根岸の家

に、母堂、妹律とともに生活した時期のことである。子規、

飄亭、虚子の三人が並んで、冬木立のもと、王子の松宇を訪ねる光景が目に見えるが如き光景であり、虚子が一捻りした「王子稻荷では、狐でなくて馬の尻を」などと洒落た面白みの句もあり、三人各様に新しい道を進む心意が見える、新鮮な句稿となっている。

四、「なじみ集」

大部な選句集「なじみ集」は、今年七月二日午後三時報道関係者に公開され、三日と四日の両日、東京神田の古書会館にて一般公開された。公開日の二日間に、断片的な時間の連続ではあったが、三三七全丁を確認できたために、即座に依頼を受けた朝日新聞に「なじみ集」の概要の論評を寄稿した(註2)。概要として、次の点に触れた。「なじみ集」が、日清戦争従軍にあたり、決意も新たに明治の俳句を結集し編集執筆したものであること。その構成は、師匠たる大原其戒を始め師匠筋の人々、先輩格、同輩、後輩の人々、縁故ある俳人、漸く投句を始めた松山など各地の俳人の句の集成たること。句を大切なものとして、無名、失名の人々の句も収録したことであった。内容上の説明は今後の説明を待つて報告したい。(本会副会長)

(註1) 伊藤松宇「正岡子規君」(『子規全集』別巻二)

(註2) 拙稿「発見された幻の書「なじみ集」朝日新聞

本社版七月二十九日夕刊、地方版は三十日朝刊。

(九月例会卓話)

正岡子規と『天降言（あもりごと）』

愛媛大学 福田安典

正岡子規に次の文章がある（傍線筆者）。

八月廿三日快晴、風少し。朝、歌話を書かんとて歌の本など取り散らし見る。始めて田安宗武の歌を見るに万葉調にして趣向斬新なり。実朝以後歌人無しと思ひしに俄に此人を得て驚喜雀躍に堪へず。吾は余りの嬉しさに虚子を猿楽町に訪はんと思ひ立ちぬ。（中略）殊に熱き日なりければ三時過ぎて人車に載せられ出づ。三月彼岸に虚子を訪ひて風引きしこのかた、始めての外出なり。（中略、東京のこと、虚子の子供のこと）

虚子は子を抱きて、重し〜といひつゝ、帰り来れり。今日此頃吾の来ることを思ひまうげざりけむ驚き喜びて話す。吾も宗武を得たる嬉しさを述ぶ。

妻なる人、氷はいかに、といふ。そはわるし、と虚子いふ。アイスクリームは、といふ。虚子、それも、といはんとするを打ち消して、喰ひたし、と吾は無遠慮

に言ひぬ。誠は日頃此物得たしと思ひしかと根岸にては能はざりしなり。二杯を喫す。此味五年ぶりとも六年ぶりとも知らず。（中略）吾も子供一人はしく思ふ。

虚子、飄亭を呼びにやる。

又宗武の歌をおる覺えに覺えたる限りいひ聞かす。

虚子、日蓮の伝を取り出だして、頻に日昭、日朗の事をいふ。

飄亭来る。どうして来た、といふ。宗武にうかされて来たといふ。

西洋料理をもてなさる。

灯を点す。（以下略）

「あざり車」（明治三十二年九月一〇日、『ホトトギス』）

この頃の子規は病に臥していた。その彼が五ヶ月ぶりに虚子のもとへ出かけた。その喜びが行間に踊っている。子規はなにゆえに驚喜雀躍したのかと言えは、彼は「歌話」（明治三十二年八月『日本』）を書こうとして、手元の「歌の

本」を拾い読みし、図らずも田安宗武の歌に出会ったからである。この感激を伝えるために子規は虚子のもとへ出かけたのであった。突然の子規の来訪に虚子は驚き、その理由を聞けば「宗武と出会ったから」という。その子規の感激は虚子には理解できなかったたのであろうか、とにかく飄亭を呼びにやったり、アイスクリームを馳走したりするが、子規は宗武の歌をおろ覚えのままに口から連射する。その思い入れは何であらうか。この日の朝に偶然に宗武を知った筈であるが、その多くの和歌を愛唱しているとは。飄亭が来る。「子規さん、どうした来たのだ」と尋ねる。「宗武に浮かされて」だと子規は答えるものの、周囲には宗武及びその和歌のどこに子規が惹かれたのかこれまた理解できなかつたであらう。

1 『天降言』について

この宗武は、八代將軍徳川吉宗の二男。正徳五年十二月、江戸赤坂に生まれる。明和八年六月、田安邸に薨す。五十七歳。法号は悠然院殿。上野の寛永寺凌雲院に葬られた。幼名小次郎、御三卿田安家の祖にして、松平定信の父。国学者、歌人として知られている。幼少より学問を好み、江戸に出たきた荷田在満（かだのありまろ）を召し抱え、古学・歌道を学ぶ。寛保二年、在満に歌道書の執筆を依頼し、在満は『国歌八論』を著して応えたが、宗武はこれに対し『国

歌八論余言』を書いて反論する（この論争にはのち賀茂真淵らも参加し、三年にわたって続けられた）。同じ頃在満の別の著作が幕府の忌避に触れたこともあり、在満は田安家の仕官を辞し、代りに賀茂真淵を推薦した。以後、真淵を師とし、宝暦十年まで重用し、古典研究を深め、後の国学者に大きな影響を与えた。在満・真淵との歌論について議論のすえまとめた『歌体約言』、古典の評論・注解である『伊勢物語註』『小倉百首童蒙訓』『古事記詳説』などを著し、また服飾、音楽、植物などの研究も行った。

少年期より和歌に親しみ、詠風はじめ堂上風の伝統主義的なものであったが、次第に万葉集の影響を深く受け、清新な発想を古風な調べにのせた独自の歌風を築いた。死後、侍臣らが編纂した家集『天降言』に和歌三百余首が収められている。また、これに紀行文や和歌を補った『悠然院様御詠草』がある。

『天降言』は宗武没後にある家臣が編集したものを、家臣藤原直臣が筆写した。一卷。短歌三〇七首、旋頭歌（せど）うか）二首がある。賀茂真淵（かもまぶち）の影響を受けてから歌が躍進し、歌の特色は万葉調、写生的である。明治三十一年に佐々木信綱により出版されてより、現在に至るまで人気があり、愛唱者は少なくない。

例えば窪田空穂は『近世和歌研究』に、

彼は老いるまで、少年の持つ驚異の情を失はなかつた。それが歌のうちに際やかに出てゐるものがある。又、すべての歌のうしろに流れてもゐる。彼は平生見なれてゐたと思はれるものを、或時には初めて見るものやうに見ることが出来た。そこには軽いながら驚異の情がある。そしてその情をとほしてその物を詠み出した。魅力とはそれである。大体は写生であるが、単なる写生とはならず、一種の気分の添つたものとなつてゐる。(中略)彼の歌を読んで、生れ来つた歌人だと思はせられるのは、主としてこの驚異の情をもつてゐるところである。彼ほどに持つてゐたものは中世の西行法師くらゐのもので、他にはちよつと見当らない。しかもその驚異の情が、実際に即してあらはれてゐるところは、江戸時代でなくては出来ないことだと思はれる。

と評している。この評には宗武の文藝の本質とともに、子規が彼のどこを評価したのかが端的に表れている。すなわち宗武の最大の特徴は「少年のような驚き」と「写生」であると窪田のこの言は、例えば宗武を子規に置き換えたとしても看官に何の違和感もなからう。それほど、子規と宗武の感性は似ているのである。

ゆえに「歌話」に展開する子規の宗武評は以下の通りで

ある。

2 子規の『天降言』評

子規の宗武評は、「田安宗武の天降言といふを見て吾はいたく驚きたり」から始まる。その驚いた理由を要約すれば、

○真の万葉調、その趣味は真淵より上、しかし万葉に固執しているわけではない。

○長句(字余り)についての意見は大したものだ。

○歌も平凡であつて平凡ではなく、「劉健にして高華なり、古雅にして清新」で「一字の懈筆なく、一点の俗気なき」歌で、それでいて「子供の作りたるやう」である。

○宗武の子の松平定信は、父に比べれば器が小さい。

ということである。

子規は古今集や紀貫之を批判したことが知られており、かたや俳句革新が知られているだけに、子規は古典和歌について厳しい評価をしていたと思われがちである。事実としてその側面はあるのだが、子規にとつての第一の標的は、「旧派歌人」という、香川景樹の一派桂園派とその桂園派と同じく明治の御歌所を形成していた歌人である。その旧派歌人が高く評価していたのが「古今和歌集」であつたの

で、子規の批判の鋒先が『古今和歌集』に向けられていたのである。ゆえに『万葉集』について子規は高い評価を与えたというより、万葉調であるかどうか子が子規にとっての唯一の評価軸となっていく。

その子規が評価していた古人がいる。源実朝である。勢い、宗武評価は実朝評価と重なっていく。

万葉以後の歌人は源実朝と田安宗武との二人なり。一は征夷大將軍にして一は征夷大將軍の子也。

子規にとつては万葉以後の歌人として評価するのは、実朝と宗武のふたりとなつた。その理由として子規は、両者の境遇の類似（高貴の地にありながら不平を抱いていること、師との関係、歌壇との関係など）を挙げているのだが、そこに文芸批評者ではなく、どうやら旧松山藩士としての子規の姿を見なければならぬのかもしれない。

子規が万葉集を評価し、御歌所の桂園派を批判したのは、その底辺に明治新政府、薩長藩閥への反発があるとする説がある（山崎敏夫「近代短歌発生と成立の背景」、島津忠夫著「近代短歌の黎明と『万葉集』」、平成一八年『島津忠夫著作集』第九卷、和泉書院刊）。万葉集に関して言えば、その注釈を契沖に命じたのが徳川光圀であつたように、徳川との関係が深い。徳川の親藩であつた元松山藩士の正岡子規

にしてみれば、万葉集及びその研究を推進した田安宗武には特別な思いがあつたのではないだろうか。また、子規会の例会の席上で和田克司氏、今村威氏に御教示いただいたが、第八代松山藩主定静は冷泉為村に師事した歌人であつたが、その定静の養子となり九代藩主となつた定国は田安宗武の子であつた。当然、松平定信とは兄弟である。松山藩は和歌にも通じ、田安宗武とは親密な関係にあつたのである。定国の跡を継いだ十代藩主定則が早世したために、その弟が藩主となつたのが十一代定通であつたが、この二人は父よりも叔父である松平定信の影響が強かつたと言われている。明教館が定通によつて建てられたことなどはその象徴である。いわば旧松山藩士であつた子規にとつては宗武には特別の思いがあつたのではないだろうか。

ただ、実朝と宗武を二人だけ抜き出して評価したのは子規だけではない。上田秋成も「（万葉集の後は）鎌倉の右のおとど（源実朝）と此殿（田安宗武）なん かかるさまによみ出させ給ひて」として、子規と同じ感想を持つていた。秋成は武士ではないので、子規のような事情は考えにくく、純粹に鑑賞のレベルで両者を評価していたのである。その意味で子規の感得力は希代の異才たる秋成と同じであつて、その秋成の鑑賞力の是非は実は子規の鑑賞力をどこまで認めるかどうかによつて判断されるといふ事態になつている（近衛典子「秋成と江戸歌壇―『天降言』秋成

抜粋本をめぐって―、平成二十一年『文学』1-2月号)。逆に言えば、秋成における『天降言』評価の正しさが証明されれば、子規の正しさも証明されることとなる。

3 正岡子規と『天降言』

―明治三十年代の近世和歌研究の台頭―

それまで、特異な存在としてやや無名であった田安宗武と『天降言』を一躍有名にしたのは正岡子規である。しかし、そのことに関しては多くの誤認がある。

土岐善麿は『田安宗武』(昭和十七年、日本評論社刊)に、
佐々木博士の直話によると、その活字本の最初の公刊に先だつて、博士は、当時既に病床に在つた正岡子規に対し、病間の慰めにと、写本の貸与をしたことがあり、子規はそれによつて、初めて宗武の作品に接し、それに就て小論を書いたことが、新たに宗武を明治年代に活かすことになつたのである。

と記す。病床の身であつた正岡子規に佐々木信綱(明治五年―昭和三十七年)は公刊に先立つて『天降言』の写本を貸し与え、子規は、初めて宗武の作品に触れ、読後に小論を書いたが、これが宗武を明治時代に復活させる契機となつたという美談が流布しているのである。

しかし、子規は佐々木信綱に『天降言』の借用を申し出たのは明治三十二年八月二十五日であり、その時期は信綱が旅行中であつたので再度申し出たのは同年九月十三日であつて、同年十二月二十二日の信綱宛書簡に「拝借の天降言遅延致候、只今御返却に及び候」とあるので、子規が信綱から『天降言』を借りたのは明治三十二年九月十三日―十二月二十二日である。

子規が『天降言』に触れたのは、信綱編集の『続日本歌学全書』七卷「近世名歌集上巻」(明治三十一年十一月、博文館刊)に拠つてであつて、土岐善麿の説や信綱の「直話」は有り得ない。

【整理】

明治三十一年十一月 信綱が『続日本歌学全書』に『天降言抄』を掲載。

明治三十二年二月 子規の信綱和歌評。

明治三十二年八月二十三日 子規が『続日本歌学全書』

の『天降言抄』を読んで感動。「歌話」を書く。

同年 八月二十五日 信綱に『天降言』の原本

借用願ひを出す。

同年 九月十三日 再度、信綱に『天降言』

の原本借用願ひを出す。

同年 十二月二十二日 信綱に『天降言』返却。

三重出身で歌人にして後に東京帝国大学で教鞭を執る佐々木信綱が『天降言』の魅力を発見し、世に公刊しようとした時は、彼がまだ二十代の若者であった。その若い情熱に、信綱よりは少し年長であった伊予松山出身の正岡子規が共鳴したことにより、『天降言』は天下に博く愛唱されるに至るようになった。

父業を襲った信綱の文献学研究は、それはそれとして高い評価を与えるべきであるが、子規の鋭い批評が無ければその仕事は注目されなかつたかもしれない。近世和歌の中で、將軍家の子息であること、刊本も無かつたこともあつて、歌壇の外にあつた田安宗武は正岡子規によつて近世第一の歌人として再発見されたのである。子規はこの時期に信綱の和歌を批評しており、若き信綱にとつて子規は畏怖すべき憧憬すべき存在であつたのであろう。その子規の力によつて自身の学者としての仕事に世に注目されるに至つたことは、信綱にとつては生涯に残る快哉であつたと思われる。そのことはそのことで善い話である。しかし、信綱はあまりにも子規のことが心に残りすぎたのであろうか、後年に美化され、話が変わっていくのである。その好例がこの『天降言』貸与の一件であることを強調しておきたい。

4 正岡子規と近世歌人

子規と信綱は、近世歌人を次から次へと再発見していく。それはそれで大筋としては正しい。その実態は少し探ってみる。

信綱は『天降言』を貸すついでに大隈言道を子規に勧めたが、子規の評価は高くなかつた(明治三十三年三月「草径集を読む」)。加納諸平(鈴屋門、「柿園集」)も勧めたが子規は気に入らなかつた。橘曙覧については、子規は信綱より『志濃夫廼舎歌集』を借りて感動し、明治三十二年三月に「曙覧の歌」を執筆して世にその存在を知らしめた。橘曙覧が世に知られたのは全く子規のおかげであると言つてもよい。平賀元義は生前不遇な人生を送り歌集も出版されるに至らなかつたが、子規は明治三十三年に根岸短歌会の赤城格堂を通じて元義を知り、これまた感動して世に推奨したため、平賀元義の名はよく知られるようになった。「上にして田安宗武、下にして平賀元義、歌よみふたり」は子規の言葉として有名である。結局は、子規の発見した近世歌人は田安宗武・橘曙覧・平賀元義の三人である。

また漱石が愛したという良寛についても子規が関わっている。伊藤左千夫も田安宗武と『天降言』を万葉調というこゝとで高く評価した。その他斎藤茂吉も『天降言』を評価する。しかし、伊藤左千夫の仕事として知られるのは良寛の評

価であろう。良寛が博く知られるようになったのは、明治三十二年に尾崎紅葉による紹介であったと思われるが、子規が良寛について書いたのはその翌年の明治三十三年十一月十四日であつて、本格的な評論は出来なかつた。その良寛批評を世に知らしめたのは伊藤左千夫である。そのタイトルは「田安宗武の歌と僧 良寛の歌」(明治四十年五月)である。伊藤左千夫の仕事及び良寛の再評価は、その根底に子規と「天降言」があつたのである。子規が「天降言」に巡り会わなかつたとしたら、近代の良寛評価は違つたものとなつていたのかもしれない。

5 後年の佐々木信綱の誤解

先に述べたように、明治三十年代に近世和歌が評価されたのは、若き信綱と死期迫る子規のおかげである。その美しい思い出が、信綱の心の中でさらに美化され、事実が正しく伝わらなくなつた。「天降言」については如上の通りだが、他にも佐々木信綱は「落合・与謝野・正岡君の追憶」(昭和三十年十一月二十六日 講演)で、

ある日のこと坂井君が、同じ社の正岡子規君が歌を詠もうと思つてゐるから、何か昔の歌の集を貸してほしいとのこと、座右にあつた好忠の曾丹集と諸平の柿園集とをかしたに、数日後返しに來られたから、さらに

曙覧の志濃夫廼舎歌集を貸すと、「前の二冊はさほどでもなかつたらしいが、曙覧はたいへん喜んでゐた」との坂井君の詞であつた。

と語る。この記事については前掲の島津忠夫が注目し、信綱は子規という評価軸によつて近世和歌を評価してゐたのではないかという指摘をされている。これは重要な指摘である。すなわち氏は、若き信綱にとつて、近代日本においてその前時代の歌人のうち、どの歌人が評価されるのかに確信が持てなかつた。そこで、子規にいくつかの歌集を貸し、その反応を見ていたのではないだろうかという事情をこの記事から読みとつてゐる。従うべきであらう。しかしながら、その証左としてこの信綱の講演を利用することには以下の点で問題がある。

この記事に対応する明治三十二年佐々木信綱宛子規書簡が残つてゐる。表書きに「書籍三冊添」とあり、本文に

恩借の歌集早く御返可申上之所取紛れ延引仕候。只今御返却申候。何有御札申候。曙覧のしのふやの集は他より借り申し候。何か外に面白きもの御不用ならば拝借致度候。右用事迄大略不尽。

五月三十一日

佐々木様

常規

西行の歌にはしるしをつけ置申候

とある。このことについて、信綱は昭和三年九月十九日の段階では「加納諸平の『柿園詠草』と、井上文雄の『彫鶴集』と、源俊頼の『散木集』をかしたやうに思ふ」（『日本及日本人』第百六十号）と語るが、昭和三十年では「曾丹集」と『柿園集』の二冊と後日に『志濃夫廼舎歌集』を貸したことに変遷している。子規との美しい思い出のほずであるが、信綱の記憶は二転、三転しているのである。

では、信綱は明治三十二年に何を「三冊」貸したのであろうか。二回の発言に共通するのは『柿園集』なので一冊はこれであろうか。子規は「しのふや集は他より借り申し候」とあるので、信綱から『志濃夫廼舎歌集』を借りたが、あまりにも感動したので、信綱に『志濃夫廼舎歌集』を返す際に、他より『志濃夫廼舎歌集』を借りて手元に残したという意味で解釈すれば、二冊目は『志濃夫廼舎歌集』であろう。もう一冊は信綱の記憶を信じれば『曾丹集』『彫鶴集』『散木集』のいずれかであることになる。

正解は子規自身が「余の初め歌を論ずる。或人余に勧めて俊頼集・文雄集・曙覧集を見よといふ」（明治三十二年三月二十二日「曙覧の歌」と記している）、『散木集』『彫鶴集』『志濃夫廼舎歌集』の三冊である。信綱は昭和三年の段階ですでに記憶違いをおかし、昭和三十年の講演段

階では全く貸していない本の名を挙げているのである。人の記憶のいい加減さを実感するとともに、子規と近世和歌との関係について信綱の言をまるのみすることへの警鐘を鳴らしておく。

また、近年の研究の一例として、盛田帝子が「陽明文庫所蔵近衛家久添削田安宗武歌について」（平成二十年十二月、思文閣出版『中世近世和歌文芸論集』）において、

（「天降言」は）ひろく流布し、宗武歌の評価を決定づけた。たとえば、上田秋成は「ひたふるに直く雄々しき上つ代」の心を詠んだ家集として『天降言』を位置づけ、宗武を源実朝以来の万葉歌人とした。宗武の本領が万葉調にあることは、秋成以降、江戸後期・近代を経て現代に至るまで、さまざまな研究者、歌人が説いてきたことである。

として、子規の果たした役割を軽視した記述をしている。繰り返すが、宗武に関しては、子規がいたからこそ「近代を経て現代に至るまで、さまざまな研究者、歌人」が説くという時流が生じたのであって、その影響力は秋成のそれとは比較にならないほど大きい。近世歌人の顕彰については子規のしたことをもう一度正しく理解する時期が来ているのではないだろうか。（平成二十二年七月例会講演）

癸丑吟社とそれを支えた人々

寫川 武彦

私は現在癸丑吟社の社員として、漢詩に接し、作詩を楽しんでいるところです。社員は十二名、男女六名づつ、主宰は森貞白雁先生、幹事は高須賀星王先生である。癸丑吟社の癸丑（キチュウ）とは吟社創設の年であり、それを採つて名付けたもので、大正二年、私の父親寫川城山の生れた年でもあります。極めて馴染み深い年で忘れることはないでしょう。たまたま今年も丑年であり、発音己丑（キチュウ）は同じで、已に八回の丑がめぐりて、後四年で百年を迎えます。松山子規会の発足が昭和十八年一月ですから、三十年も早く生まれたことになりました。百年も続くとは全国でも稀有な例だと思えますし、誇りとなすべきでしょう。過去同吟社は同人集を第五輯まで発行しています。大正二年から昭和四十五年までの五十八年間の作品です。この第五輯までの同人の数は百六十八名、そのうち現在残っている方は、伊藤竹外先生、森貞白雁先生の二名のみで、後進の指導に身を尽していただいています。長きに亘り、癸丑吟社を支えてこられた人達やその作品について、この同

人集を中心に紹介し、今後の参考に供したいと思えます。その前に漢詩界の現状につき、若干触れて置きたいと思えます。

一 漢詩界の現状

先ず、どの位の人達が漢詩に親しんでいるかである。四国四県を皮切りに、伊藤竹外先生を先頭にした働き掛けに呼応して、各地に連盟が結成されつつあるが、創立五周年を迎えた全国漢詩連盟の会員数も伸び悩んでいる。平成二十年七月末現在の会員数は一七一八名、二千名に及ばない実状にある。愛媛県ではどうか。二十一年三月末現在十五吟社で百五十名を切る状況にあるという。しかも、昨年二吟社が解散している。

今話題の漢字検定協会の受験者は、年間延数百万人に達すると見られ、漢詩と漢字の一字違いでも、その違いの大きさには驚かされます。漢詩衰退の要因は戦後の教育改革にあると云われています。漢字の数を制限し、それ以上の

ものは教えない。又漢文という学科が独立の学科ではなく
なつて、国語の中に組み込まれてしまつた。外国語である
英語は小学生から、いえ保育園の時代から学ばせていると
いうのに。

次に漢詩をなぜ学ぶのかです。全国漢詩連盟の会長であ
る石川忠久先生は次のように云つています。「漢詩は元は
勿論中国のものでありますが、返り点のおかげで、日本の
ものになつてゐるのです。ですから、世界的に見ても不
思議なことなのですが、日本人だけがこれを直接読める。そ
ういう自覚が必要です。漢文はどうせ中国のものであるか
ら勉強したつて意味がない。と言う人がいますが、これは
短絡的です。我々はこれを日本の言葉としてゐるのですか
ら、一将功成つて万骨枯ると読めばそのまゝ、すつと入つて
来ます。中国語をいくら勉強しても漢文を読めるようには
ならない。中国人も古典を読むときは古典を勉強しなけれ
ば読めないのです。その辺に錯覚があつて、我々は先祖が
開発した素晴らしい訓読法を持つてゐる。先祖が開発して
くられて、ずーつとそれ以来身に沁みつてゐる。こんな良い
ものをどうしてやらないのか、というのが私の持論です。」
と。

二 癸丑吟社創設

當時を語るものとして、昭和四十二年七月鳶川城山作と

する「癸丑吟社誌」なるものがある。しかし、開いて見る
に新野斜村先生の字である。自分のことを述べるに、恰も
城山が書いた如くに記してゐる。その吟社誌の中から、癸
丑吟社創設の事情を述べた部分を抜粋すると次の如くであ
る。

「明治中年前後ハ吾カ愛媛県下ノ漢詩界ハ小牧櫻泉（名昌
業）、勝間田鉄琴（名稔、第五代愛媛県知事）等ノ時代ニシ
テ松山地方ニハ香蘭吟社ノ存スルアリ、近藤南洋（名元修、
元晋（晋）の父）、同南松（名元弘、南洋の弟）、浦屋雲林（名寛
制）、河東静溪（名坤）其ノ他多クノ詩人ガ輩出セシガ、此
等ノ人々ガ凋謝スルニ及ビ吟社モ廢滅シ、從ツテ詩連モ衰
微ニ赴キツツ幾年月ヲ經過セリ。大正二年一月松山市ノ近
藤小南、内山黙愛ノ兩人市内榎町ノ新野斜村（当時医術開
業）ヲ訪問シ、三人談合ノ結果、初メテ詩社創立ノコトヲ
内定ス。即チ同年一月二十六日午後市内唐人町観音寺厨房
ヲ借り、始メテ同志会合ス。此歳癸丑ニ當ルヲ以テ採テ吟
社ノ名ト定ム。」と。この観音寺については、「松山子規会
を支えた人々」（子規会誌九一号白田三雅著）の中に、創立
会員で昭和三十一年迄に没した人、江戸黙禪（三番町観音
寺住職）の名がある。

癸丑吟社第一集の会合については、同人集巻頭に絶句三
首と参加者八名の柏梁体連句が載つてゐる。勿論白文です
ので、読み下しとその大意を加えてみました。

近藤小南(四十四才)

開歳未看風氣淳 開歳未だ風氣の淳なるを看ず。

雪霏雨濯峭寒新 雪霏雨濯して峭寒新たり。

拈來與佛爲微笑 拈じ來つて佛と微笑を爲す。

領略梅花一點春 領略す。梅花一點の春を。

年頭に當つて未だ天候の淳なるを見ず。雨雪降りそいで寒さ又新たなるを覚ゆ。香を拈り來つて、観音寺佛と微笑を爲す。しかし、庭に出て梅一點の花発くを見、漸く春の來れるを覚れり。

同 池田星陵(四十六才)

眼中英物澹相親 眼中の英物澹として相親しむ。

詩律細論情自眞 詩律細かに論じて情は自から眞なり。

疎影斜邊玉山倒 疎影斜なる辺玉山倒る。

梅香酒氣一龕春 梅香酒氣一龕の春

常に心に思つていた英俊とあつさりと相親しむを得、詩律を細かに論じて、眞情を盡せり。梅花のほとり普段紳士たる者も、酔いて崩るる如く、梅の香りと酒の氣と共に、寺院の春の樂しみを盡せり。

同 新野斜村(三十五才)

百年天地幾回春 百年の天地幾回の春

算到浮生感慨新 算うれば浮生に到りて感慨新たり。

唯我吟心寒不死 唯我が吟心は寒くとも死せず。

梅花々下倍精神 梅花の花下精神を倍せん。

多くの年をこの世で過ごし、我が人生に春は幾度めぐり

來たかと、振り返り算うれば、はかない人生に思い到り

て感慨も又新たなり。唯我が歌ごころはこごえ縮まつて

はいるが、歌を作る心を失つた訳ではない。梅の木の花

下で詩友と精神を高め、風雅を樂しみたいものである。

限韻とは作詩の韻を限定することであり、この三首は上平聲十一眞韻によつて作られてゐる。その日の天候の厳しい中に、梅一點の春を看、風雅を愛する人達と親しく談笑し、杯を傾け吟社発会の喜びに溢れてゐる。

癸丑吟社第一集席上柏梁體聯句

霧縠烟綃松山城 霧縠、烟綃、松山城 小南

恰似墨画頃刻成 恰も墨画に似たり頃刻成る。 默愛

風騷壇坫新訂盟 風騷、壇坫、新訂盟 星陵

花信風傳古寺櫻 花信風伝う、古寺の桜 鏡肝

半簾瓊樹暮烟横 半簾の瓊樹暮烟横たう。 快風

一是一非任人評 一是一非、任人の評 斜村

醉裡談笑肝膽傾 醉裡の談笑、肝膽を傾く 咬菜

總是人間風月情 総て是れ、人間、風月の情 孤雲

殺ちりめん 綃うすぎぬ 壇坫 堂の隅 任人 ねぢけびと

平仄を○●にて表示してゐる。柏梁體は与えられた韻字を用いて、当日の会に関する情景を七言にて表現するも

の。この日は、下平聲八庚の韻が各人に与えられ、規則に縛られることなく、却つて平仄を弄んでいる。若々しい人達の奔放な息吹を感じるのである。

三十代、四十代の錚々たる人達を中心に、一堂に会し、作詩に耽る。入れ代り立ち代り、墨をすり筆を揮う。作品を見つつ、飲み且つ吟じたであろう。彷彿として眼に浮かぶ如しである。いづれにしても、漢詩界の発展に寄与せんとして、吟社創立を成した諸先輩に敬意を表したい。

三 雑誌「人間味」

過日、近藤小南先生のお孫さんに当る近藤元規さんより、「昔の資料を整理していたら、人間味という雑誌があり、その中に癸丑吟社同人の漢詩が多数載っている。」との連絡が、宇和常任理事のところにあり、陪して見せて頂く。人間味は大正十三年紀元節に創刊された月刊誌である。漱石が大正五年に亡くなって、殆んど同時に漢詩の欄が新聞雑誌から消えてしまったという。このような漢詩凋落の時代、郷土松山では、「詩林癸丑吟社同人」として、誌面の一翼を担っている。誠に痛快事であり、機会があれば報知したいと思つていたのである。詩林とは多くの詩人が集まつている處の意味であり、この頃の癸丑吟社同人の集りはどうであろうか、柏梁体連句を繕いてみましょう。

月刊雑誌「人間味」大正十三年二月創刊

発行所 人間味社 松山市新玉町一丁目七十番地

顧問 後藤新平 安政四年〜昭和四年（一八五七—一九二九）

政治家、伯爵、岩手県出身、須賀川医学学校卒。内務省に入り、台湾民政長官、貴族院議員、滿鉄初代總裁、第二次桂内閣の通相兼鉄道院總裁等をつとめ、以後、内相、外相、東京市長を歴任した。

社長 安井雅一 明治七年〜昭和二十八年（一八七四—一九五三）

松山出淵町生、岡山医学専門学校卒、軍医中尉として旅順戦に参加、明治四十一年産婦人科開業。大正十二年松山医師会長、昭和七年松山脳病院設立、同十年県医師会長、日本医師会理事など歴任、同二十二年公選松山市長。二光庵、山果と号し句画に長じた。（松山子規会を支えた人々、白田三雅著より）

風詠館新年宴集柏梁体聯句（大正十四年）

乙丑正月月中 乙丑正月、月の正中 星陵

梅香薰徹満園風 梅香、薰は徹る、満園の風 舜梁

趁約例会古城東 約を趁う例会、古城の東 斜村

春與人心兩融融 春と人心と、両ながら融々たり。 蘇山

詩鼓酒兵互相攻 詩は酒兵を鼓して、互に相攻む。 咬菜

相見勃勃意氣通 相見て勃勃として、意氣通ず。 孤雲

文壇誰樹第一功 文壇、誰か樹てん、第一の功 春峰

杯飛吟廳興不窮 杯飛び、吟廳りて、興窮まらず。 稻孫

性靈吐來萬丈虹 性靈吐き来る、萬丈の虹 小南

正中まなまなか 勃々はつはつ盛もんなさま

高興清趣。叙寫無遺。讀之尚覺身在酒香吟聲中。

（高興清趣。叙寫遺る無し。之を讀みて尚身は酒香吟聲の中に在るを覺ゆ）

清樂館新年宴集聯句（大正十五年）

癸丑社迎丙寅春 癸丑社は迎える、丙寅の春を 咬菜

詩仙郎對酒聖人 詩仙郎は對す、酒聖人 小南

唯我白戰氣不伸 唯、我が白戰、氣伸ばず 稻孫

強掉航船苦吟呻 強く航船に掉せば、苦だ吟呻 斜村

醉來耳熱興更新 醉來りて耳熱く、興更に新たなり。孤雲

酒量詩力誰超倫 酒量、詩力、誰か超倫せん 蘇山

休道我輩意氣貧 道を休めよ、我輩の意氣貧しきを。殺斎

吟聲如玉飛梁塵 吟聲は玉の如く、梁塵を飛ばす。舜樂

雲煙滃渤膽輪困 雲煙滃渤として、膽輪困たり。星陵

詩仙郎しせんらう詩の大家 酒聖人しうせいじん善く酒をのむもの 吟呻いんしんうめく

超倫ちゆうりんとびぬけすぎる 滃渤しうはく盛んなさま 輪困りんこん高大なさま

燈影酒影。談聲吟聲。彷彿湧于文字間。結一句實描出當

日筆花墨雨之狀。看者勿以爲一片醉語。（燈影酒影。談聲

吟聲。彷彿として文字の間に湧く。結の一句實に当日の

筆花墨雨の狀を描出す。看る者以て一片の醉語と爲すこ

と勿なれ。）

前者の柏梁体は上平声一東の韻、後者のそれは上平声十一眞の韻で作られている。又說夢吟客註を附すとして、誰と解らない評がある。平（○）と仄（●）の韻を弄ぶことは吟社発会の時と変らず、力量を誇っている。各人各様、その日の雰囲氣を適切適格に、余す所なく叙写している。意氣盛んなること羨ましい限りである。

四 癸丑吟社を支えた人々

癸丑吟社同人集個人別首數調には、主たる人四十四名の輯毎の所載首數を記し、所載作品の少ない人については、その他として整理させてもらった。なお松山子規会を支えた人々（子規会誌九十一号）に所載されている者には○印を付した。

癸丑吟社同人略歴等（入社順）には主たる人四十四名について記載した。その略歴については、同人集に記載あるものはそれを用いた。但し第一輯には略歴の記載がないため、他の資料を引用した。なお不明の人については、今後の調査に待ちたい。略歴の後に、同人集の中から、小生の独断と偏見により、適宜作品を撰んで載せた。兎に角同人集の作品は延四千三百首に及ぶのである。それぞれ癸丑吟社を支えて来た人達の素晴らしい作品であり、漢詩の良さを実感していただければ幸いである。

癸丑吟社同人集 個人別首数調

癸丑吟社 同人氏名		入社 年	第1輯 大2~昭28 41年間	第2輯 昭29~昭31 3年間	第3輯 昭32~昭35 4年間	第4輯 昭36~昭40 5年間	第5輯 昭41~昭45 5年間
○近藤小南	元晋	大2	275 ^首	13	9	-	-
内山黙愛	直枝	〃	36	-	-	-	-
新野斜村	良隆	〃	199	36	84	50	107
池田星陵	萬次郎	〃	91	-	-	-	-
松田咬菜	謙太郎	〃	47	-	-	-	-
伊奈雙洲	信弑	〃	32	-	-	-	-
高市如雲	盛清	〃	18	-	-	-	-
山崎稻孫	集	〃	46	-	-	-	-
大道寺松園	一善	3	46	-	-	-	-
伊藤毅斎	政重	5	59	-	-	-	-
中神靄外	愿	7	33	-	-	-	-
鷲野舜樂	紹三郎	8	22	-	-	-	-
櫻井青陽	清與	〃	45	23	-	-	-
宇治原春峯	基泰	9	42	-	-	-	-
阿部蘇山	徳三郎	10	91	-	-	-	-
岡本雪山	奎太郎	昭3	38	-	-	-	-
○成川臥雪	房幸	10	37	-	-	-	-
天野夏山	忠敬	12	58	-	-	-	-
○露口越山	悦次郎	13	50	-	-	-	-
八東南溪	壽弘	14	27	28	7	-	-
○小原六六庵	清次郎	15	22	25	65	22	77
澤田世外	稻衛	20	2	退社 0	昭33入社 31	16	27
兵頭拙斎	守雄	21	25	22	29	6	-
○浦屋東村	魁	23	19	26	64	27	-

癸 丑 吟 社 同 人 氏 名		入 社 年	第 1 輯 大 2 ~ 昭 28 41 年 間	第 2 輯 昭 29 ~ 昭 31 3 年 間	第 3 輯 昭 32 ~ 昭 35 4 年 間	第 4 輯 昭 36 ~ 昭 40 5 年 間	第 5 輯 昭 41 ~ 昭 45 5 年 間
○玉置竹外	哲 二	昭26	9	22	28	-	-
猪野木堂	嘉次郎	27	10	22	14	-	-
居村王處	富士助	29	〃	27	56	36	47
佐竹研山	教 雄	〃	〃	32	-	-	-
芝 翠石	盛 好	〃	〃	22	42	32	44
松本芝堂	指 道	〃	〃	18	3	-	-
大塚晴洲	和 勝	〃	〃	20	31	1	-
上田禾僊	武 雄	〃	〃	19	33	22	-
林 桐人	正 策	31	〃	7	68	51	96
小西仙霞	庫太郎	32	〃	〃	50	28	75
岡田方瑞	久 夫	33	〃	〃	19	4	7
伊藤竹外	泰 博	〃	〃	〃	41	23	22
古木越堂	秀 策	〃	〃	〃	44	53	147
吉野花村	正太郎	35	〃	〃	20	28	23
吉野桃葉	豊	38	〃	〃	〃	6	83
○鳶川城山	武 夫	39	〃	〃	〃	16	142
森 貞白雁	同	〃	〃	〃	〃	14	42
石田如是	哲 明	41	〃	〃	〃	〃	26
明比鳧水	貢	42	〃	〃	〃	〃	22
池内刀泉	文 雄	〃	〃	〃	〃	〃	24
そ の 他			31名	5名	15名	10名	10名
			153	25	80	52	51
合 計			57名	21名	35名	28名	27名
			1532 ^頁	387	818	487	1062

○印 松山子規会を支えた人々（子規会誌91号）に所載。

癸丑吟社同人略歴等（入社順）

近藤 元晋もとゆき 「又号觀我生。明治二年生松山市。幼受家庭教

育。成人之後爲各府県学校教師。昭和三十五

年四月十四日病逝。」吟社の創立者、第一、二

輯巻首の序を識す。

悼内藤鳴雪翁 大正十五年作（五十七才）

翁曾有梅散的鶴廻子寒幾二月加奈之俳句、後半故及。

三蕉葉酒醉懷寬 三蕉葉酒醉懷寬やかに

十七字詩垂不刊 十七字詩垂れて刊らず。

好句空成華表識 好句空しく華表の識を成す。

梅花零落鶴聲寒 梅花零落して鶴声寒し。

蕉葉二底の浅い小杯の名 華表二墓前の門

内山 直枝 吟社創立に貢献した一人。昭和十三年三月二

十七日逝去。次の詩は所載最後の作品である。

偶詠と云いながら、辞世の句の如くである。

冬日偶詠 昭和十二年作

歲月如流水 歲月は流水の如く

忽々夢裡過 忽々として夢裡に過ぐ。

頽齡將八十 頽齡將に八十ならんとす。

老去歎蹉跎 老去蹉跎を歎ず。

忽々二あわたたしいさま 頽齡二老年をいう 老去二年をとる

蹉跎二時機を失う

新野 良隆

「明治十一年生温泉郡垣生村。卒業東京帝國

大学医科大学。奉職東京及地方病院。後帰松

山。医術開業。老後廃業読書自適。」吟社創立

後五十八年間支えた。第三、四輯巻首の序を識

す。昭和四十六年七月二十七日満九十三歳に

正岡子規 昭和三十一年作（七十八才）

萬首搜拈錦繡腸 萬首搜拈す、錦繡の腸

誰言屑々小詞章 誰か言う、屑々たる小詞章と

終生病苦兼吟苦 終生、病苦と吟苦と

六尺繩牀即道場 六尺の繩牀即ち道場なり。

錦繡腸二詩文を善くし、容易に佳句を吐くにいう。

繩牀二繩を張つて作りし腰かけ

池田萬次郎 慶応三年一昭和十四年。松山。教員。星陵漫

稿（昭和十一年刊。十四歳一六十九歳漢詩集。）

（愛媛県史より）

悼池田星陵翁 新野斜村作（昭和十五年）

老來詩骨最崢嶸 老來、詩骨、最も崢嶸たり

醉後才鋒誰敢爭 醉後の才鋒、誰ぞ敢て争わん。

珠玉篇成依麴蘖 珠玉の篇は麴蘖に依り成り

亦依麴蘖損其生 亦麴蘖に依り其の生を損なう。

崢嶸二深く険しき貌 才鋒二才のほこさき 麴蘖二酒をいう。

松田謙太郎

元治元〜昭和十九年。香蘭社会稿同人。「道後竹枝次南洋近藤先生瑤礎」五首愛媛県史に所載あり。昭和五年作五言律詩に「我自東武還。庚午秋之暮。」とあり、居を東京に移していた。

松田咬菜婦自東京來訪、喜賦一律

近藤小南作(昭和十八年)

鬢鏤都門老布衣 鬢鏤たり、都門の老布衣

也思鱸膾忽南帰 也鱸膾を思いて、忽ち南帰す。

佳兒良婿親迎道 佳兒、良婿、親しく迎う道

舊識新交恰會機 旧識、新交、恰も会する機

蕭寺探梅逢酒熟 蕭寺の探梅酒の熟するに逢い

故山聽雨夢微肥 故山の聽雨微の肥ゆるを夢む。

一帆迢遞重東去 一帆迢遞、重ねて東去

剩看春風滿釣磯 剩り看る春風滿釣の磯

布衣官位なき人 迢遞はるかに遠し

遊大梅寺 昭和十八年作(同人集最後の作品)

好文木倚巨巖傍 好文木は巨巖の傍に倚り

老幹幾年凌雪霜 老幹、幾年、雪霜を凌ぐ

楣上仰瞻三大字 楣上、仰瞻す、三大字

淋漓墨氣有餘香 淋漓たる墨氣、餘香有り。

好文木梅の異名 楣上のきの上 淋漓したたる貌

伊奈 信弼

唯一消息を示す詩一首あり。

挽雙洲國手

近藤小南作(大正七年)

憶曾徵逐酌流霞 曾ての徵逐するを憶う。流霞を酌み

一醉吟場一笑譁 一醉の吟場、一笑譁しきを。

濟世妙方門作市 濟世の妙方、門は市を作し

繪心餘伎筆生花 繪心の餘伎、筆は花を生ず。

三春夢斷人琴冷 三春夢断ちて、人琴冷やかに

五夜鶉啼風雨斜 五夜鶉啼いて、風雨斜なり。

痛絶中川鳴咽水 痛絶中の川、鳴咽の水

偏和薤露到僧家 偏えに薤露を和して、僧家に到る。

徵逐招きたり、招かれたり、互に往來すること

流霞仙人の飲む美酒の名 濟世世をすくう

薤露葬を送る時に歌う歌

新 秋 大正五年作

小園無地不鳴蟲 小園地無く虫鳴かず。

殘日蕭々碧一叢 殘日蕭々として、碧一叢

欲浴新涼蕪瘦骨 新涼に浴さんと欲して、瘦骨に蕪える。

豆花籬落倚秋風 豆花の籬落、秋風に倚る。

殘日夕日 蕭々ものさびしき貌 一叢ひとむら

籬落まがき

高市 盛清 創立同人なれど、大正三年より昭和十年まで

作品なし。昭和十三年作「秋思」を最後に後
作品を見ず。

晴朝獨坐

大正二年作（同人集最初の作品）

捲簾爽氣滌襟煩 簾を捲けば、爽氣襟の煩ひを滌い

露濕青苔樹影昏 露は青苔を濕ほし、樹影昏し。

曉月低飛孤嶂外 曉月は低く飛す、孤嶂の外

鵲聲如夢過林園 鵲声夢の如く、林園を過ぐ。

捲簾すだれをまく 曉月あけがたの月

孤嶂ひとつ離れた高い山

山崎 集

同人集最後の作品となつた次詩より推定し
て、安政四年生か。昭和十二年七月二十五日

逝去。

丁丑元旦 昭和十二年作

半生營々不脱貧 半生營々として、貧を脱せず。

四時一瞬去來類 四時一瞬、去來類なり。

瓶梅薰處兒孫會 瓶梅薰る処、兒孫と會す。

齊祝家翁八十春 齊しく祝う、家翁が八十の春。

營々利を求むるにあくせくする貌 四時春夏秋冬

瓶梅かめに生けた梅 家翁の家長

大道寺一善 昭和元年作「丙寅十一月過碓氷嶺」を最後に

作品を見ず。消息を示す詩も見えず。

拜桃山御陵 大正七年作

列樹蘚苔綠作層 列樹、蘚苔、綠層を作し

菊花空映古龕燈 菊花空しく映す、古龕の燈に

蕭々秋冷桃山路 蕭々として、秋冷なる桃山路

一帶寒雲鎖御陵 一帶の寒雲、御陵を鎖せり。

古龕古きづし 蕭々ものさびしき貌

桃山御陵 京都市伏見区にある明治天皇陵

伊藤 政重

昭和十三年。大洲市生れ。明治三十二年
昭和七年松山中学教諭。藤重詩文稿（二三卷。

昭和十七年編）（愛媛県史より）

春日閑居 昭和十年作（同人集最後の作品）

書齋盡日苦吟身 書齋、盡日、苦吟の身

又值滿城春色新 又值う、滿城の春色新たなるに

蹙頞沈思由底事 蹙頞、沈思、由るは底事

非愁非病又非貧 愁に非ず、病に非ず、又貧に非ず。

盡日ひねもす 蹙頞憂えるさま

中神

愿 昭和十一年作「秋晚雜興」を最後に作品を見
ず。消息を示す詩も見えず。

早春 大正七年作

一枝吟杖歩梅堤 一枝の吟杖、梅堤を歩せば

時聽黃鶯隔水啼 時に黃鶯の水を隔てて啼くを聴く。

昨雨晴來土皆濕 昨雨晴れ來りて、土皆濕る。

郊村十里麥苗齊 郊村、十里、麥苗齊し。

吟杖詩人の携えるつえ 黃鶯うぐいす

鷺野紹三郎 昭和七年作「落花」を最後に作品を見ず。同

年蘇山翁の悼詩あり。

甲舜樂翁

阿部蘇山作（昭和七年）

雙鏢何圖鬼鏢跡 雙鏢、何ぞ図らん、鬼鏢に躋るとは

詩盟洒約竟空際 詩盟の洒約、竟に空しく際けり。

蕭々寒雨杉溪夕 蕭々たる寒雨杉溪の夕

寂寞當年舊隱栖 寂寞たり、当年の旧隱栖

鬼鏢 眞府で死者の姓名を記す帳簿

杉溪 鷺野亭は松山市杉谷町に在り。 隱栖 かくれが

櫻井 清興 「明治十年生松山市大街道。卒愛媛尋常中学校

業。商業経営。平素嗜漢詩及臨池。昭和二十三

年五月九日病逝。」第一、二輯の編集に携わる。

正岡子規

昭和三十一年作

三長該得曠世才 三長該り得たる曠世の才

筆開獨境氣崔嵬 筆は獨境を開いて、氣崔嵬たり。

短章断句成心血 短章、句を断つに、心血成し。

俳道依君興起来 俳道、君に依つて、興起来る。

三長 史家に必要な三つの長所、才智・学問・識見 曠世 また

と世にない 崔嵬 高くして大いなり 興起 盛んにおこる。

悼櫻井青陽翁

新野斜村作（昭和三十三年）

苔岑多歲鷺兼鷗 苔岑、多歲、鷺と鷗と

白社相逢意氣投 白社相逢うて、意氣投す。

少壯憂時參市政 少壯、憂時、市政に參じ

終生繼業把牙籌 終生、繼業、牙籌を把る

換鷺儘遣臨池興 換鷺、儘臨池の興を遣り

挑燭常爲索句囚 挑燭、常に索句の囚と爲す。

一去駢驚呼不返 一たび去る、駢驚、呼べど返らず。

淚零且直舊書樓 淚零つ、且直、舊書樓

苔岑 同志の友をいう 鷺鷗 風流の交をいう

白社 古隱士の居 牙籌 象牙にて作りたるかずとり

換鷺 王羲之が道德經を書きて鷺と交換せし故事

臨池 習字の義 駢驚 美しい車 且直 書樓の名

桐人曰く、両研青陽先生の生涯を叙して、餘蘊（あまり）無し。

起結亦情韻極めて深く、人をして黯然（別を惜みてかなしむ貌）

とせしむ。

聽子規 大正八年作

空山如太古。只聽子規鳴。空山太古の如し、只子規の鳴くを聴く。

恍惚天明際。聽爲落月聲。恍惚、天明の際、聴き爲す落月の声

空山 しづかなる山 天明 明けがた

宇治原基泰

昭和二十四年作「観花雑詩」を最後に作品を見ず。消息を示す詩も見えず。

白髪

大正九年作

半生閑卧海南濱 半生、閑に臥う、海南の浜

暖夢桃源幾送春 暖夢、桃源、桃送春

空刺絲々雙鬢色 空しく刺す絲々、雙鬢の色

愁看落寞鏡中人 愁看す、落寞たる鏡中の人

愁看こくうれへてみる 落寞らくまさびしいさま

阿部徳三郎

昭和九年作「河内村観瀑」を最後に作品を見ず。「悼阿部先生」岡本雪山及「哭蘇山」近藤

小南二詩あり。

弔蘇山

池田星陵作（昭和十年）

梅花殘笛月臨除 梅花、殘笛、月除を臨み

脉々寒香簾影疎 脉々たる寒香、簾影疎なり。

恍想杉溪々上路 恍として想う、杉溪々上の路

遊魂髣髴訪吾廬 遊魂、髣髴、吾が廬を訪ぬ

脉々いさ絶えざる貌 寒香さむか梅のほひ 髣髴ほうふつさもにたり

出郭

昭和元年作

浅流燕尾露平沙 浅流は燕尾の如く平沙に露なり。

行樂何辭野徑除 行樂、何をか辞さん、野徑除に

百尺黄雲鴨脚樹 百尺の黄雲、鴨脚樹

幾堆紫錦鷄冠花 幾堆の紫錦、鷄冠花

西風短髮人將老 西風、短髮、人將に老いんとし。

寒靄疎鐘日易斜 寒靄、疎鐘、日斜に易らんとす。

觸目悲愁自催感 觸目、悲愁、自ら感を催す。

橋邊徙倚望帰鴉 橋邊徙倚して、帰鴉を望めり。

黄雲わううん葉の黄熟したさまの喩 鴨脚樹おつぎくしいちようの木

紫錦むらさきむらさき地のにしき 鷄冠花けいこうけいとうの花

西風せいふう秋の風 觸目しよく目に見えて感ずる 徙倚しよたちもとおる

岡本李太郎

昭和三年入社。昭和十四年作「観蓮」を最後とす。昭和十五年作「悼雪山」近藤小南、新

野斜村詩あり。

太山寺如來藏室小集

昭和三年作

戊辰五月旬三日、邀癸丑吟社諸先生於太山寺如來藏室、

此日快晴、薰風入坐、殊覺快適、諸先生各有詩、揮灑

縱橫、住職宮崎僧正周旋備至、使余恣詩酒之興、併致

謝意云

倒屣迎佳客。如來藏室前。倒屣佳客を迎う、如來藏室の前

微鐘山上寺。嫩葉雨餘天。微鐘山上の寺、嫩葉雨餘の天

談及詩唐宋。杯回酒聖賢。談は詩の唐宋に及び、杯は酒の聖賢を回る。

毫端聯妙墨。一一起雲烟。毫端聯妙の墨、一一雲烟起る。

倒屣たうげ人を歓迎するの意 毫端ごうたんふでのさき

雲烟うんえん筆跡の見事な形容

秋曉 昭和十年作

林樹風聲鬧。池汀月色幽。 林樹風聲鬧し、池汀月色幽なり。
天兼紅葉曙。水與白雲流。 天と紅葉と曙て、水と白雲と流る。
池汀池のみぎわ

成川 房幸 明治元年十二月十一日、昭和二十四年四月五日。東京帝大農科林学科卒。大正十二年退職。道後湯之町々長。伊予史談会々々長。(松山子規会を支えた人々白田三雅より)

聞落葉 昭和二十三年作(同人集最後の作品)

滿砌就荒霜露生 滿砌就荒して、霜露生じ
一籬細菊亂縱橫 一籬の細菊、縱横に乱る。
悲風落木秋將暮 悲風、落木、秋將に暮れなんとす
聽作雨聲渾葉聲 聽き作す雨声、渾葉の声
滿砌きざはしのあたりいづばい 細菊きざく

天野 忠敬 戦災後単独幹事となつたが、茨城県日立市に移住したため、成川卧雪と交代した。昭和二十八年作「春雪」を最後とす。

題立川寓居壁 昭和二十七年作

湖遊不學武陵漁 遊を湖りても、武陵の漁を学ばず。
嘯月吟風樂我居 月に嘯き、風を吟じて、我が居を楽しむ。
近水遙山摩詰畫 近水、遙山、摩詰の畫
断雲飛霧右軍書 断雲、飛霧、右軍の書

武陵漁 武陵の漁人が溪に沿って行き、桃源郷に至つた故事がある。
摩詰 唐の王維の字、南畫の祖 右軍 晉の王羲之

露口悦次郎 慶応三年八月二十三日、昭和二十八年六月十四日。東京高等師範卒。校長歴任、大正七年伊予鉄役員、同十年、十三年北予中学校長、のち石鉄寮舎監。(松山子規会を支えた人々)

白田三雅より)

悼露口越山翁 新野斜村作(昭和二十八年)

少壯曾傳二陸賢 少壯曾て伝う、二陸の賢
其人如玉性情全 其の人は玉の如く、性情全し。
夙班教局留殊績 夙に教局に班なりて、殊績を留め
更管運輸過暮年 更に運輸を管どりて、暮年を過す。
憂世時催吟裡淚 世を憂いて、時に吟裡の涙を催し
銜杯儘作酒中仙 杯を銜んで、儘酒中の仙と作す。
消魂忽隔幽明界 消魂、忽ち隔つ幽明の界
梅雨天陰哭杜鵑 梅雨の天陰、杜鵑も哭す。
二陸 晉の陸機と陸雲と、兄弟共に詩文を善くす。
殊績 優れたるいさを 銜杯 酒を飲む
酒中仙 酒を飲んで世の中を忘れ居る者 消魂 心を奪われる
幽明 くらきと明るさと 天陰 天がくもる

八束 壽弘

「明治三年生松山市港町。卒愛媛師範学校業。

歷任県下小学校長。教職二十八年後爲高野山
大学図書館司書。昭和三十四年三月六日病
逝。」

悼八束南溪翁 浦屋東村作（昭和三十四年）

無頼春寒迫草庵 無頼の春寒、草庵に迫り

忽然傳計恨何堪 忽然として計を伝う、恨何ぞ堪えん。

通家戚属互来往 通家、戚属、互に来往

交膝慇懃常笑談 交膝、慇懃、常に笑談

鬢鏤加齡秩開几 鬢鏤、加齡して、秩几を開き

萍蓬流寓地更三 萍蓬、流寓して、地三たび更う。

華城空作不歸客 華城、空しく不帰の客と作し

彷彿温容追憶耽 彷彿たる温容、追憶に耽りたり。

通家トウカ 父祖の代より親しく交際する家 戚属セキリョク 母や妻の身うち

萍蓬ヘイほう 流寓リウヨウ 他郷にさすらいすむ 華城ケイジョウ 花盛りの街

重咏圓通寺老柏 昭和十六年作

岩峯々下托靈竒 岩峯々下托靈竒なり

鳳舞龍吟風起時 鳳舞い龍吟じ風起る時

七百星霜猶翁鬢 七百星霜、猶翁鬢たるが如し。

孤根不恨莫人知 孤根、恨みず、人の知る莫し

翁鬢オウボン 草木の盛んなる貌

小原清次郎

「明治三十四年生温泉郡垣生村。就從兄中村

翠濤学書道。昭和七年據不律漢詩壇後「漢詩
誌」入會。結成愛媛吟詠連盟。爲獨立書人團
参与、愛媛県美術展審査員。漢詩文学連盟参
与。昭和五十年十月十五日病逝。」

癸丑吟社五十周年壽言 昭和三十八年作

于花于月捻吟髭 花に月に、吟髭を捻り

癸丑騷壇多父師 癸丑の騷壇、父師多し。

菊放瑞香香襲客 菊は瑞香を放ち、香は客を襲い

松誇晚翠翠涵池 松は晚翠を誇り、翠は池を涵す。

半錢利路毫無意 半錢の利路、毫かも意無く

萬里長城遠入思 萬里の長城、遠く思入る。

吟社年周迎半百 吟社、年は周り半百を迎え

佳哉慶祝酒盈卮 佳哉、慶祝の酒は卮に盈つ。

父師 大夫の七十にして致仕した者

晚翠 冬枯の時にも変らざるのみどり

川 昭和四十二年作

源發石峯湛碧漣 源を石峯に發して、碧漣を湛え

崢嶸流去灌鄉田 崢嶸たり、流れ去きて、郷田に灌ぐ

鰾思上善水之性 鰾思すれば、上善は水の性

千古涼々重信川 千古、涼々たり重信川

崢嶸 けわしき貌 鰾思 思いなおすこと

上善 最上の善（老子）

上善若し水、水善利萬物而不争。淙々し水の流れる貌

澤田 稻衛 「明治十三年生高知市鴨部。卒業東京高等商業

学校。歴任福岡、香川、兵庫、北海道、長野各県教職。農業経営。昭和五十一年十二月逝去。

失題 昭和三十六年作

知命歸田耕讀耽 知命、田に帰して耕読に耽り

乘時放膽儘高談 時に乘じては放膽、儘高談す。

満頭鶴髪甘郷老 満頭の鶴髪、郷に甘んじて老いるも

豪氣猶存世外庵 豪氣、猶世外の庵に存り。

知命し天命を知る。五十歳をいう。鶴髪し白髪

桐人日、半生之身世、叙得妙、結語勇壯。

兵頭 守雄 「舊姓橋本。魯堂之一族。嗣兵頭家。明治三十七

年生宇和島。卒業宇和島中学校及京都同志社

高商部。爲吉田高等学校教諭。当時爲吉田町

吏員。」

田舎賞菊 昭和三十八年作（同人集最後の作品）

飄々扶杖宿痾軀 飄々として、杖に扶けらる宿痾の軀

重九尋詩遊別區 重九詩を尋ねて、別區に遊ぶ。

栽菊何加自然好 栽菊、自然の好きに、何をか加えん。

東籬黃白兩三株 東籬の黃白、兩三の株。

飄々しさまようさま 宿痾し久しくなりしやまい。

重九し陰歷九月九日の節句 別區し異なつた地区

兩三し二三つ

斜村日、善説栽菊之秘訣、有し此筆力、病魔亦應退散

浦屋 魁 「明治十三年生松山市相生町。卒業東京農科大

学駒場林学部。歴任高知、広島、鹿児島等営林

局署。昭和七年退職。昭和四十年三月二十三

日病逝。」同人集第一、二、三輯の編集、校正等

に当る。

悼浦屋東村翁 新野斜村作（昭和四十年）

親交爾汝互相憐 爾汝と親交して、互に相憐み

一任世情容易遷 一任、世情容易に遷る。

多歲居官留業績 多歲、官に居て、業績を留め

餘生避俗卧園田 餘生、俗を避け、園田に卧す。

提携有誼人非俗 提携に誼ありて、人に俗あらず

後顧無憂兒綰賢 後顧に憂無く、兒は賢を綰ぶ。

腸断柩車移殯處 腸断の柩車は殯處に移る。

風寒悄立暮門前 風寒く悄立す、暮門の前

爾汝しなんち 提携し互に相たすける義 悄立し憂いて立つ

一月十五日偶占 昭和四十年作

姉自東來弟自西 姉は東より來り、弟は西よりす。

共歡奇遇一枝棲 共に奇遇を歡ぶ、一枝棲

忽々小宴酌春酒 忽々として、小宴、春酒を酌み
乘興捫詩紙上題 興に乗り、詩を捫りて、紙上に題す。

斜村日、家庭和樂之景、現「出句中」。

玉置 哲二 「明治十三年生鹿兒島。卒東京物理学校業。歷
任東京府立第一中学校外教校。教職五十年。」

昭和三十九年「悼玉置竹外翁」芝翠石作が
ある。

秋江晚眺 昭和三十五年作（同人集最後の作品）

對岸樹林紅間黃 對岸の樹林、紅間の黄

夕陽沒去月如霜 夕陽沒し去りて、月霜の如し。

都人駐杖賞幽景 都人、杖を駐め、幽景を賞す。

自贊秋村行樂郷 自贊す、秋村、行樂の郷

斜村日、通し篇老練可レ喜

猪野嘉次郎 「明治十五年生越智郡菊間町。卒京都府立第一

中学校業。進学神戸高等商業学校。帰郷營造
酒業。爲株式会社猪野本店社長。昭和三十六

年二月七日病逝。」

春雪 昭和三十二年作

夜來春雪滿繩山 夜來の春雪、繩山に滿ち

一白巍々指願間 一白、巍々たり、指願の間

想見當年蒙遠謫 想い見る當年、遠謫を蒙りて

羸駢羸帽過藍関 羸駢、羸帽、藍関を過ぐ。

巍々ハ高大なる貌 遠謫ハ遠方へゆく 羸駢ハつかれたぞえ馬
羸帽ハけがわのぼうし

居村富士助 「明治十三年生北宇和郡岩松町。商業經營。爲

岩松町長。老後農業經營。」昭和四十二年秋有

悼詩

乙巳元旦 昭和四十年作

祝杯添得白銀魚 祝杯、添え得たり、白銀の魚

微醉陶然思太初 微醉、陶然として、思い太初なり。

八十六翁元旦曉 八十六翁、元旦の曉

焚香端坐讀仙書 焚香、端坐して、仙書を読む。

太初ハ萬物の由りて生ずるはじめ 焚香ハ香をたく

斜村日、氣力旺盛不レ似「八十六翁之句」 元日哉、神代事毛悞波
留々、是芭蕉之句乎、果其角之句乎、敢問

佐竹 教雄 「明治十七年生北宇和郡泉村。学京都同志社。

爲四国配電小倉出張所長。昭和十四年退職。
従事農業。就綿引東海学漢詩。昭和三十一年

十一月病逝。」

梅雨 昭和二十九年作

梅雨連旬細似絲 梅雨、連旬、細きこと糸に似たり

挿秧期近水盈陂 挿秧、期近、水陂に盈つ

一尊先喚隣翁祝 一尊、先ず喚く、隣翁の祝
豚牝今朝産八兒 豚牝、今朝、八兒を産む。

連句 毎句(十日) 挿秧 田植えをする

芝

盛好

「明治二十一年生北宇和郡泉村。学愛媛師範
学校。歷任県下諸学校教職。昭和二十九年退
職。昭和四十三年六月病逝。」

正岡子規

昭和三十一年作

吟苦多年親藥鑑 吟苦、多年、藥鑑に親しみ

蘭摧不朽刺文章 蘭摧朽ちず、文章を刺す。

可憐辭世斗痰句 憐れむべし辞世、斗痰の句

牆上絲瓜空獨香 牆上の絲瓜、空しく獨り香る。

藥鑑 しくすりなべ 蘭摧 賢人の死をいう

松本

指道

「明治十七年生廣島市新川場町。歷任臨濟宗
妙心寺派地方宗務所長其他諸宗務。經歷五十
年。昭和二十四年爲伊達家菩提寺龍華山等覺
寺住職。」

迎春所感

昭和三十五年(同人集最後の作品)

祥氣瑞氣滿乾坤 祥氣、瑞氣、乾坤に満ち

薰沐新衣拜至尊 薰沐、新衣、至尊を拜す。

喜壽迎春多少感 喜壽の春を迎えて、多少の感あり。

詩盟道友幾人存 詩盟、道友、幾人か存らん

祥氣 めでたき氣 乾坤 天地

薰沐 香を衣に薰し髪を洗いて身をきよめる。

至尊 この上なく尊いもの

大塚

和勝

「画号素石。明治十年生北宇和郡吉田町。卒業
岡山医学専門学校。歸郷開業。平素嗜短歌及
南画。昭和三十六年病逝。」

森邸觀牡丹

昭和三十六年作(同人集最後の作品)

歳々牡丹勞夢思

歳々の牡丹夢思に勞め

此園奇種世間稀 此の園の奇種、世間に稀なり。

桃櫻零落春將老 桃桜零落して、春將に老いとすれど。

爛漫華開富貴姿 爛漫たる華、富貴の姿を開けり。

夢思 夢の思、い 零落 花が枯れ落ちること

斜村日、一結掉尾(文章に力あるをいう)、全篇爲振(動きをなすをいう)

上田

武雄

「明治三十二年生北宇和郡清満村。学東京早稲
田。後爲華道池坊流教授。又嗜日本画。爲大

阪有秋會々員。」

秋日大洲卧龍山莊小集 昭和四十年作

古城牆壁映江頭 古城の牆壁江頭に映じ

脈々肱川繞郭流 脈々たる肱川、郭を繞つて流る。

山紫水明紅葉麗 山紫水明、紅葉麗し

騷人喜集卧龍秋 騷人、喜び集う、卧龍の秋

山紫水明 山水の風景の美しき形容 騷人 詩人

斜村日、能寫「山紫水明境」、如「見」彩色絵圖

倏忽仙遊去 倏忽、仙遊して去る。

一期一會人 一期一會の人

倏忽 たちまち 仙遊 人の死をいう。

林 正策 「明治二十四年生松山市衣山町。卒業陸軍經理

学校。爲陸軍主計大尉。後爲伯爵久松家々扶。

昭和四十四年九月十四日逝去。」第三、四、五輯

欄外批點を施す。

偶 占 昭和四十四年作

大井奔流筍根嶽 大井の奔流、筍根の嶽

颯車今日瞬時過 颯車、今日、瞬時に過ぐ。

當年開化愜公益 當年の開化、公益に愜い

各地紛爭乱國家 各地の紛爭、國家乱る。

暴力書生僵暴力 暴力書生は、暴力に僵れ

文華學者醉文華 文華學者は、文華に酔う。

邦家前路豈容易 邦家の前路は豈容易ならんや

一億蒼生正奈何 一億蒼生、正に奈何せん。

颯車 疾い車 文華 文明の華 蒼生 人民

斜村日、起得崛然(起り立つ貌) 有「氣勢」、兩聯概管「時事」、使

一人一說正襟

悼林桐人先生 池内刀泉作(昭和四十四年)

雁聲傳計報 雁声、計報を伝う。

獨坐淚痕新 独り坐して、涙痕新たなり。

小西庫太郎 「明治二十四年生松山市刈屋町。卒業上海東

亜同文書院。奉職三井物産(株)。勤務本店及大

連、漢口各支店。昭和二十一年退職。果樹園

経営。」

雲門寺小集 昭和四十一年作

鹿苑青々接茂林 鹿苑、青々として、茂林に接し

涼風徐度和蟬吟 涼風、徐かに度りて、蟬吟と和す。

遠來同志耽詩賦 遠來の同志、詩賦に耽り

半日清遊滌垢心 半日の清遊、垢心を滌えり。

鹿苑 釋迦が最初に説法した所 垢心 けがれたところ

岡田 久夫 「大正三年生温泉郡久谷村。卒業松山農業学

校。愛媛青年師範学校并陸軍予備士官学校。

陸軍大尉。戦後奉職愛媛県庁。爲松山県事務

所稅務長。愛媛県住宅供給公社総務課長。」

訪土佐桂濱 昭和四十四年作

維新青史腦中回 維新の青史、腦中を回り

作客南州弔古來 客と作して、南州、古來を弔う。

凝眺大洋龍馬像 大洋を凝眺す、龍馬像

獨揮涕淚立高臺 獨り涕涙を揮つて、高臺に立つ。

青史ニ歴史 凝眺ニ目を一方に注ぎてみつめる。

斜村日、勝地與ニ英雄 相依成レ景。此詩能捉レ得其實一。

伊藤 泰博 「大正十年生松山市中一万町。卒業松山高等

小学校。現六六庵吟社主宰。愛媛県漢詩連盟

會長。全日本漢詩連盟副會長。その他現職多

数。」 高杉東行先生百年祭奉納吟詠大會

席上作 昭和四十一年作

覺醒惰眠鏡有聲 惰眠を覺醒して、鏡に声あり

松村同志鬪爭英 松村の同志、鬪爭の英

内憂外患一時到 内憂外患、一時に到り

攘狄勤皇百說生 攘狄勤皇、百說生ず。

吐露丹心傳砲術 丹心を吐露して、砲術を伝え

排除舊套設奇兵 旧套を排除して、奇兵を設く。

維新鴻業是誰力 維新の鴻業、是れ誰が力ぞ

萬古千秋留姓名 萬古、千秋、姓名を留む。

桐人日、雅兄近業中之傑作

賦呈島川城山先生 昭和四十五年作

朝臨拓水洗心塵 朝に拓水を臨んで、心塵を洗い

夕仰龜城培性眞 夕に龜城を仰いで、性眞を培う。

詩遡三唐探究遍 詩は三唐に遡りて、探究遍し。

騷壇鼓吹古精神 騷壇、鼓吹す、古精神

越堂日、城山先生之面目躍如。

古木 秀策 「明治四十五年生新潟県上越市。卒業陸軍士

官学校。爲陸軍少佐。従軍日支事变及太平洋

戰爭。戦後被拘禁瓦霧島及巢鴨刑務所。昭和

三十一年釋放。従事整體指導。」平成十七年一

月二十九日九十二才にて没す。第五輯卷首の

序を識す。 癸卯八月十五日、送八萬人署名簿中国政府、請願釋

放日本人戦犯。戦犯在遼寧省撫順獄中。

昭和三十八年作

遼寧原上女牛横 遼寧原上、女牛横たう。

十八年回涕淚傾 十八年回りて、涕淚傾く。

邊月雁鴻囚虜夢 邊月、雁鴻、囚虜の夢

秋風刀尺老妻情 秋風、刀尺、老妻の情

浮雲邈々三千里 浮雲、邈々たり、三千里

連署昭々八萬名 連署、昭々たり、八萬名

酌酒齋祈西海穩 酒を酌いで齋祈す、西海穩やかに

此書無恙到燕京 此の書、恙無く、燕京に到らんことを。

刀尺ニはさみとものさしと裁縫の用具 邈々ニ遠いさま

昭々ニあきらかなる貌 齋祈ニものいみしいのる。

燕京ニ北京

斜村日、兩聯悲壯激越、意調並到

東村日、一心貫徹奏「其功」、真可謂「功勞偉人」、敬服敬服。

吉野正太郎

「明治二十一年生松山市安城寺町。卒業警察大學本科。警察署勤務十五年。後奉職住友鑛業勤務十七年。爲愛媛県遺族会副会長。家庭裁判所調停委員。松山西警友会會長并愛媛県警友会連合会副會長。」

山寺觀楓

昭和四十一年作

寂歷山中一逕幽 寂歷たる山中、一逕幽なり

滿溪霜葉白雲流 滿溪の霜葉、白雲流る。

清遊隨處拾詩好 清遊、隨處、詩を拾うて好し

照映夕陽楓寺秋 夕陽に照映す、楓寺の秋

斜村日、全句完璧、無「懈字」、此篇遂爲「花村翁絶筆」、一読駭然吁

吉野

豊

「明治二十七年生周桑郡小松町。学東京渡邊女学校師範科。奉職東雲高等女学校舎監十年。戦後松山市連合婦人会長、愛媛県及松山市社会教育委員。愛媛県母子相談委員。爲松山家庭裁判所調停委員。」

哭良人

昭和四十二年作

供花奠菜祭靈魂 供花、奠菜、靈魂を祭り

一炷香煙聲暗吞 一炷の香煙、暗に声を呑む。

畢竟人生唯露命 畢竟、人生、唯露命

悟空三誦佛陀言 悟空、三誦、佛陀の言

一炷ひとくゆり 畢竟つまり 佛陀はほとけ

斜村日、言々眞摯、哀愴無限、切折「自家愛護」而已。

高川 武夫

「大正二年生上浮穴郡小田町。卒業立正大学高等師範科。奉職愛媛県庁二十七年。株西四国

ヤクルト工場長。」平成十二年一月二十三日

八十六才にて病逝。第五輯編集主として之に

当る。

己酉歲暮書感 昭和四十四年作（五十五才）

子女辨養焚釜鬻 子女は養を辨ち、釜鬻を焚き

妻君拮据亂衣襟 妻君は拮据して、衣襟を乱す。

主人不管家庭累 主人は家庭の累に管せず。

坐聽昇平白杵音 坐して聴く、昇平、白杵の音。

釜鬻 釜と大釜と 拮据 いそがしく働く形容

昇平 世が平らかでしづか

斜村日、善写「家庭之細事」、意到筆隨。

森貞

同

「大正八年生温泉郡三内村。卒業陸軍教導学校。従軍太平洋戦争。爲小野村立若緑保育園長。果樹園経営。」今癸丑吟社を支える。

中秋金龜城頭作 昭和四十一年作（四十六才）

桂花香裡草蟲鳴 桂花の香裡、草虫鳴き

月下傾杯坐三更 月下、杯を傾けて、三更に坐す。

舊雨新知共拋盡 旧雨、新知、共に盞を抛て

吟聲朗々震高城 吟声、朗々、高城に震えり。

桂花もくせいの花 三更ニ夜十二時 旧雨ニ古き友

斜村日、古城看月、俯、仰今古、其興可ニ想望。

石田 哲明 「明治二十一年生。卒業駒澤大学佛教科。爲山口県防府市多々良学園高等学校教諭。星岡五

岳山雲門寺住職。昭和五十二年五月九十才にて逝去。

歲暮書懷 昭和四十三年作

齡老才疎一醉翁 齡老いて、才疎な、一酔の翁

追懷往事愧無功 往事を追懷すれば、功無きを愧づ。

三更茗茗寒灯下 三更、茗茗す、寒灯の下

除夜鐘聲萬慮中 除夜の鐘声、萬慮の中

煮茗ニ茶を煮る

斜村日、愛酒嗜茶、此翁風流、勝人一等

明比 貢 「明治二十八年生西條市。」

戊申歲晚 昭和四十三年作

小齋傾酒樂陶然 小齋、傾酒、樂しみ陶然たり

一朵瓶梅雙眼前 一朵の瓶梅、双眼の前

七十三齡身幸健 七十三齡、身幸にして健なり

生來未結病痾緣 生來、未だ病痾と縁を結ばず。

陶然ニ心地よく酔う貌 一朵ニ一枝 病痾ニながわづらい

斜村日、老來不レ知病、眞受ニ天寵者、可レ羨。

池内 文雄 「明治四十年生伊豫郡北伊豫村。卒業松山中学

校。爲愛媛県醬油統制(株)新居浜出張所長。終戦後同社業務第二部長。愛媛県護国神社禰宜。

戊申初夏處和書屋小集 昭和四十三年作

拓堤新樹翠娟娟 拓堤の新樹、翠娟娟

回首山城景色鮮 山城を回首すれば、景色鮮やかなり。

一醉主翁停盞起 一酔の主翁、盞を停めて起ち

名詩朗詠聳吟肩 名詩の朗詠、吟肩を聳やかせり。

娟娟ニ美しいさま 吟肩ニ詩人の肩 處和書屋ニ寫川城山宅

越堂日、情景彷彿句中。

「子規会誌」目録（一〇〇号～一二二号）

作成 風本幸子

一〇〇号 平成十六年一月 在庫三五〇冊

目次

発刊のあいさつ 松山子規会会長 浦屋 薫

祝辞 愛媛県知事 加戸 守行

創刊一〇〇号記念にあたり 松山市長 中村 時広

子規と遊ぶ 子規記念博物館館長 天野 祐吉

子規の俳句―明治二十七年以降の秋の句を中心に 韓国中央大学教授 孫 順玉

子規と万葉集「万葉集卷十六」の分析を中心として 韓国中央大学校副教授 具 廷鏞

「たるみ」考―子規の俳論用語 神奈川大学教授 復本 一郎

正岡子規の「小十句集」と俳句十句集 前松山子規会会長 和田 茂樹

子規自筆稿「明治卅三年十月十五日記事」について 古田 拓氏の論考

前子規記念博物館館長 長谷川孝士

伊予俳諧の流れ

一遍智真・栗田樽堂・正岡子規

松山俳句協会会長 相原左義長

曾我正堂 副会長 乾 燕子

子規・碧梧桐の連句「芭蕉」を読む 愛媛大学教授 田村 憲治

私と子規会 会 員 二神 將

子規と小林小太郎 理 事 三好 恭治

伊予松山藩の英学徒たち 副会長 和田 克司

明治二十九年秋の「承露盤」の構成について 前会長 和田 茂樹

座談会「松山子規会を語る」 会 長 浦屋 薫

副会長 塩崎 月穂

副会長 三由孝太郎

司 理 事 白田 三雅

副 理 事 白田 三雅

副 理 事 白田 三雅

副 理 事 白田 三雅

副 理 事 白田 三雅

副 理 事 白田 三雅

特別寄稿「後輩たちは今、」

俳諧徒然草

俳句甲子園から学んだこと

第六回俳句甲子園観戦記

俳句甲子園に参加して

松山東高校俳句部の誕生と現状

報告 国際シンポジウム「正岡子規と俳句」開かれる

二〇〇三年 一〇月一日ソウル中央大学校で

愛媛新聞事業局局长 鳥谷 照雄

事務 局

「子規会誌」の頒布について

「子規会誌」目録

作成 常任理事 井手 康夫

正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

一〇二号 平成十六年七月 在庫一四六冊

近代日本語のページ目を書いた人 天野 祐吉

子規と連句について(二) 神野 昭

日清戦争期における

日本新聞の報道と論説(一)

卓話 伊藤秀夫について 谷 光隆

松山子規会平成十六年度総会について 井手 康夫

雲汀閑話(1)庚申庵の事ほか 井手 康夫

一〇三号 平成十六年十月 在庫一三〇冊

第一〇三回子規忌法要

子規と連句について(三) 神野 昭

日清戦争期における

日本新聞の報道と論説(二)

松風会の人々 谷 光隆

松根東洋城と洪柿 白田 三雅

雲汀閑話(2)定静公紀行の事附百済魚文のこと 二神 將

書評森元四郎著作集「椿守り」 井手 康夫

和田 克司

一〇一号 平成十六年四月 在庫一三七冊

子規居士自句草稿

「春夏秋冬」の原稿の一枚 戒能 申脩

子規と連句について(一) 神野 昭

安倍能成の軌跡 忽那 哲

一学者としての安倍能成一

平成十四年度、平成十五年度

一〇四号 平成十七年一月 在庫一三三冊

正岡子規「名勝八景」を詠む

— 日比谷八景の漢詩と俳歌 —

外国の子規忌韓国編

子規と哲学僧

卓話 子規さん日中文化の掛け橋

糸瓜の家を訪ねて—根岸子規庵訪問記

松本 松吉

松本 博之

喜田 重行

池内 央

神野 香澄

一〇七号 平成十七年十月 在庫一五四冊

第一〇四回子規忌法要

子規の寸言(一)

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(三)

— 側面観子規従軍史 —

子規と三津の生洲(澁々園)

— なぜ子規は「いけす」によく行ったか —

喜田 重行

谷 光隆

二神 將

一〇五号 平成十七年四月 在庫五四冊

正岡子規と南岳草花画巻をめぐって

「記」の系譜—「庚申庵記」を考えるために

子規の囲碁観と俳句

「伊予節について」

和田 克司

福田 安典

二神 將

高橋 俊夫

平成十六年度

正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

一〇八号 平成十八年一月 在庫一五九冊

正岡子規の偉人先哲を讃える詩歌(中国編)

「散策集」について

子規さんと紅緑さんと—その紐帯を探る—

白田三雅さんを悼む

悼 白田三雅翁

松本 松吉

和田 克司

忽那 哲

宇和 宣

畠川 武彦

東温地域の俳諧について

— 『西門家旧蔵俳諧資料』を中心に —

卓話 吉田蔵澤について

松山子規会平成十七年度総会について

神野 昭

井手 康夫

井手 康夫

一〇九号 平成十八年四月 在庫二〇七冊

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(四)

— 側面観子規従軍史 —

正岡子規と中野道遥

谷 光隆

今村 威

子規の東京大学予備門「落第」の周辺

—隈本有尚と漱石・子規—

三好 恭治

一一二号 平成十九年一月 在庫一六六冊
奈良・「子規の庭」、「對山楼」跡に完成 烏谷 照雄

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(六)

一一〇号 平成十八年七月 在庫一七一冊

岡田燕子句集「白牡丹」の周辺

乾 英司

—側面観子規従軍史—
子規さんの俳句双六—一路十年の軌跡 乾 英司
漱石の小説と子規—吾輩は猫である・虞美人草・三四郎—

「伊豫史談」に見る

子規会創立前の子規・漱石顕彰の様子

戒能 申脩

加藤国安著「漢詩人子規—俳句開眼の土壤—」(研文出版)

子規・良寛・八一

喜田 重行

「散策集」を中心とする
明治の松山関係資料提供のお願い 井手 康夫
忽那 哲

栗田樗堂追善俳諧集「蟻の道」

井手 康夫
今村 威

一一一号 平成十八年十月 在庫一七〇冊

第一〇五回子規忌法要

松山子規会と高川城山

高川 武彦

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(五)

—側面観子規従軍史—

谷 光隆

卓話 渡部政和について

井手 康夫

松山発(子規事典)

和田 克司

平成十七年度

正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

子規居士の事ども

井手淳二郎

子規を恋した極堂
—その始まりは交際申し込みだった— 二神 將
郷土を讃える子規の漢詩 松本 松吉
「散策集」注釈(その一) 雄郡・余戸・今出コース

神野 香澄・今村 威・福井みどり

一一四号 平成十九年七月 在庫一〇六冊

正岡子規と陸羯南

和田 克司

子規と虚子の間

平岡 英

華山の蓮の花剪らましを(上)

谷 光隆

松山子規会平成十九年度総会について

井手 康夫

子規に関する雑話(6)(7)

井手淳二郎

一一五号 平成十九年十月 在庫九七冊

第一〇六回子規忌法要

伊予に來た大阪俳人―稲本梅門を例に―

福田 安典

子規の三並良あて最初の書簡

長谷川孝士

環大平洋俳句大会裏話(一)

乃万美奈子

『散策集』注釈(その二) 中の川・石手川堤コース

宇和 宣・忽那 哲

一一六号 平成二十年一月 在庫一五〇冊

子規とモーツァルト

喜田 重行

子規の旅

宇和 宣

環大平洋俳句大会裏話(二)

乃万美奈子

平成十八年度

正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

一一七号 平成二十年四月 在庫一六三冊

井手眞棹の三番町邸について

井手 康夫

高濱別業記

眞川 武彦

子規と松山にかかわる俳句

和田 克司

華山の蓮の花剪らましを(下)

谷 光隆

松山子規会南予支部設立十三周年

乾 英司

俳句と講演の会について

環大平洋俳句大会裏話(三)

―クツシユマン氏との出会いと松山聾学校訪問―

乃万美奈子

『散策集』注釈(その三) 石手・道後コース

井手 康夫・三好 恭治・風本 幸子

一一八号 平成二十年七月 在庫一四九冊

和田茂樹名誉会長を悼む

森 慎吾

大原其戎宗匠と森連甫(一)

森 慎吾

子規の短歌観

森 慎吾

―子規のよしとする歌を中心に―

忽那 哲

『散策集』注釈(その四) 城北コース

忽那 哲

平岡 英・福井みどり

井手 康夫

松山子規会平成二十年総会について

井手淳二郎

子規に関する雑話(9)

井手淳二郎

一一九号 平成二十年十月 在庫九一冊

第一〇七回子規忌法要

韓日文化交流と子規

—二〇〇七韓日文化交流セミナー—

連句からみた

栗田樗堂と小林一茶

大原其戎宗匠と森連甫(一)

鼠骨のあせり

子規に関する雑話(10)

一一〇号 平成二十一年一月 在庫二二六冊

『散策集』注釈(その五) 道後湯之町コース

子規の文章についての一考察

一茶・麦土両吟歌仙

「梅の木」の巻」

平成十九年度

正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

子規に関する雑話(11)

一一二号 平成二十一年四月 在庫二二三冊

子規と異文化

「散策集」と「松山名所三十二句」

栗田樗堂の俳風

新刊紹介 門田圭三著

『花の旅かさ・花なれや』

—一茶・兔文の歌仙発見—

一二二号 平成二十一年七月 在庫二二二冊

平成二十一年度総会について

子規のいとこと三鼠

大原其戎宗匠と森連甫(三)

石手寺近辺の『散策集』について

孫 順玉

和田 克司

今村 威

編集部

在庫二二二冊

井手 康夫

平松 牛夫

森 慎吾

井手 康夫

二神 將

忽那 哲

今村 威

井手淳二郎

「子規会誌」研究対象人物別索引（一〇〇号～一二二号）

作成 風本幸子

研究対象人物タイトル

筆者 号数 頁数

ア会津八一

子規・良寛・八一

喜田 重行 110 16～23

安倍能成

安倍能成の軌跡

—学者としての安倍能成—

忽那 哲 101 17～24

イ一遍智真

伊予俳諧の流れ

—一遍智真・栗田樗堂・正岡子規—

相原左義長 100 47～57

井手真棹

井手真棹の三番町邸について

井手 康夫 117 1～3

井手桑州

高濱別業記

井手雲汀

雲汀閑話(1)庚申庵の事ほか

井手 康夫 102 33～34

羅川 武彦 117 3～5

雲汀閑話(2)定静公紀行の事附百済魚文のこと

伊藤秀夫

卓話 伊藤秀夫について

稲本梅門

伊予に來た大坂俳人—稲本梅門を例に—

福田 安典 115 2～6

オ大原其戎

大原其戎宗匠と森連甫(一)

大原其戎宗匠と森連甫(二)

大原其戎宗匠と森連甫(三)

岡田燕子

岡田燕子句集『白牡丹』の周辺

乾 英司 110 1～8

岡村三鼠

子規のいとこと三鼠

カ門田兔文

新刊紹介 門田圭三著『花の旅かさ・花なれや』

平松 牛夫 122 5～11

— 一茶・兔文の歌仙発見 —

門屋麦士	編集部	121	29	32
一茶・麦士両吟歌仙「梅の木の巻」				
今村 威		120	22	26

河東碧梧桐

子規・碧梧桐の連句「芭蕉」を読む

田村 憲治	100	62	64
-------	-----	----	----

『三千里』『続三千里』に見る碧梧桐の文章について

忽那 哲	106	8	15
忽那 哲	106	34	

碧梧桐の俳句雑感

キ清沢満之

子規と哲学僧

喜田 重行	104	19	28
-------	-----	----	----

ク陸 羯南

正岡子規と陸羯南

和田 克司	114	1	9
-------	-----	---	---

隅本有尚
子規の東京大学予備門「落第」の周辺
— 隅本有尚と漱石・子規 —

三好 恭治	109	23	36
-------	-----	----	----

百済魚文

雲汀閑話(2)定静公紀行の事附百済魚文のこと

井手 康夫	103	38	
-------	-----	----	--

栗田樗堂

伊子俳諧の流れ

— 一遍智真・栗田樗堂・正岡子規 —

相原左義長	102	47	57
雲汀閑話(1)庚申庵の事ほか			
井手 康夫	102	33	34
『記』の系譜 — 『庚申庵記』を考えるために —			
福田 安典	105	9	15

栗田樗堂追善俳諧集「蟻の道」

今村 威	110	29	32
------	-----	----	----

連句からみた栗田樗堂と小林一茶

今村 威	119	9	18
今村 威	119	19	28

栗田樗堂の俳風

コ小林一茶

連句からみた栗田樗堂と小林一茶

今村 威	119	9	18
------	-----	---	----

一茶・麦士両吟歌仙「梅の木の巻」

今村 威	120	22	26
------	-----	----	----

新刊紹介 門田圭三著『花の旅かさ・花なれや』

— 一茶・兔文の歌仙発見 —

今村 威	121	29	32
------	-----	----	----

小林小太郎

子規と小林小太郎 — 伊子松山藩の英学徒たち

三好 恭治	100	73	79
-------	-----	----	----

サ佐藤紅緑

子規さんと紅緑さんと — その紐帯を探る —

忽那 哲	108	23	30
------	-----	----	----

寒川鼠骨

鼠骨のあせり

戒能 申脩 119 29 31

シ高川城山

松山子規会と高川城山

高川 武彦 111 3 9

白田三雅

白田三雅さんを悼む

宇和 宣 108 31

悼 白田三雅翁

高川 武彦 108 32

ソ曾我正堂

曾我正堂

乾 燕子 100 58 61

夕高浜虚子

子規と虚子の間

平岡 英 114 10 19

ナ中野逍遙

正岡子規と中野逍遙

今村 威 109 13 22

夏目漱石

子規の東京大学予備門「落第」の周辺

三好 恭治 109 23 36

—隅本有尚と漱石・子規—

「伊豫史談」に見る

子規会創立前の子規・漱石顕彰の様子

戒能 申脩 110 9 15

漱石の小説と子規

—我輩は猫である・虞美人草・三四郎—

忽那 哲 112 23 30

フ古田 抃

子規自筆稿「明治問三年十月十五日記事」について

—古田 抃氏の論考— 長谷川孝士 100 41 46

マ正岡子規

子規さんと遊ぶ

天野 祐吉 100 3 4

子規の俳句—明治二七年以降の秋の句を中心に—

孫 順玉 100 5 16

子規と万葉集

—「万葉集卷十六」の分析を中心として—

日本人の自然観と子規の俳句 具 廷鏞 100 17 24

子規と松尾芭蕉

孫 順玉 100 108 107 108

正岡子規の晩年の世界 J・バイチマン 100 112 110 108 107 108

子規と韓国 和田 克司 100 113 112 110 108

伊予俳諧の流れ

—一遍智真・栗田橋堂・正岡子規—

子規・良寛・八一 相原左義長 110 100 16 47 23 57

「たるみ」考—子規の俳論用語— 喜田 重行 110 16 47 23 57

正岡子規の「小十句集」と俳句十句集 復本 一郎 100 25 29

和田 茂樹 100 30 40

子規自筆稿「明治問三年十月十五日記事」について

古田 拡氏の論考―	長谷川孝士	100	41	8
子規・碧梧桐の連句「芭蕉」を読む	田村 憲治	100	62	64
子規と小林小太郎―伊予松山藩の英学徒たち	三好 恭治	100	73	79
明治二十九年秋の「承露盤」の構成について	和田 克司	100	80	92
子規居士自句草稿―「春夏秋冬」の原稿の一枚	戒能 申脩	101	1	9
子規と連句について(一)	神野 昭	101	10	16
近代日本語のページジ目を書いた人	天野 祐吉	102	1	4
第一〇三回子規忌法要	神野 昭	102	5	14
子規と連句について(二)	神野 昭	103	2	9
子規と連句について(三)	神野 昭	103	2	9
正岡子規「名勝八景」を詠む ―日比谷八景の漢詩と俳歌―	松本 松吉	104	1	8
外国の子規忌韓国編	松本 博之	104	9	18
子規と哲学僧	喜田 重行	104	19	28
卓話 子規さん 日中文化の掛け橋	池内 央	104	29	30
正岡子規と南岳草花画巻をめぐる	和田 克司	105	1	8

子規の囲碁観と俳句	二神 将	105	16	26
子規の寸言(一)	喜田 重行	106	1	7
子規の寸言(二)	喜田 重行	107	3	10
子規と三津の生洲(澁々園) ―なぜ子規は「いけす」によく行ったか―	二神 将	107	21	30
正岡子規の偉人先哲を讀める詩歌(中国編)	松本 松吉	108	1	11
子規さんと紅緑さんと―その紐帯を探る―	忽那 哲	108	23	30
正岡子規と中野逍遙	今村 威	109	13	22
子規の東京大学予備門「落第」の周辺 ―隅本有尚と漱石・子規―	三好 恭治	109	23	36
「伊豫史談」に見る 子規会創立前の子規・漱石顕彰の様子	戒能 申脩	110	9	15
子規・良寛・八一	喜田 重行	110	16	23
子規居士の事ども ―三戸正虎氏の話及び松山中学校成績表―	井手淳二郎	111	28	31
子規に関する雑話(5)	井手淳二郎	111	32	31
子規さんの俳句双六―一路十年の軌跡―	乾 英司	112	19	22

奈良・「子規の庭」、「對山樓」跡に完成

烏谷 照雄 112 1 } 8

漱石の小説と子規

—我輩は猫である・虞美人草・三四郎—

忽那 哲 112 23 } 30

加藤国安著

『漢詩人子規—俳句開眼の土壤—』(研文出版)

忽那 哲 112 31

郷土を讃える子規の漢詩

子規を恋した極堂

—その始まりは交際申し込みだった—

二神 將 113 6 } 14

正岡子規と陸羯南

子規と虚子の間

子規に関する雑話(6)

子規に関する雑話(7)

子規の三並良あて最初の書簡

和田 克司 114 1 } 9

子規とモーツァルト

子規の旅

子規と松山にかかわる俳句

子規の短歌観—子規のよしとする歌を中心に—

平岡 英 114 10 } 19

子規に関する雑話(9)

井手淳二郎 118 40 } 26

韓日文化交流と子規

—二〇〇七韓日文化交流セミナー—

朴 智暎 119 3 } 8

子規に関する雑話(10)

子規の文章についての一考察

井手淳二郎 119 32 } 30

子規に関する雑話(11)

子規と異文化

子規のいとこと三鼠

マ松平定靜

雲汀閑話(2)定靜公紀行の事附百濟魚文のこと

松根東洋城

松根東洋城と渋柿

松尾芭蕉

子規と松尾芭蕉

ミ三並良

子規の三並良あて最初の書簡

モーツァルト

子規とモーツァルト

森元四郎

書評 森 元四郎著作集「椿守り」

和田 克司 103 39 } 40

森 連甫

大原其戎宗匠と森連甫(一)

森 慎吾

118

9
17

大原其戎宗匠と森連甫(二)

森 慎吾

119

19
28

大原其戎宗匠と森連甫(三)

森 慎吾

122

12
29

ヤ柳原極堂

子規を恋した極堂

—その始まりは交際申し込みだった—

二神 將

113

6
14

ヨ吉田藏澤

卓話 吉田藏澤について

井手 康夫

106

26
29

リ良寛

子規・良寛・八一

喜田 重行

110

16
23

ワ和田茂樹

和田茂樹名誉会長を悼む

井手 康夫

111

19
21

渡部政和

卓話 渡部政和について

井手 康夫

118

1
8

イ伊予節

「伊予節について」

高橋 俊夫

105

27
32

カ華山の蓮

華山の蓮剪らましを(上)

谷 光隆

114

20
27

華山の蓮剪らましを(下)

谷 光隆

117

13
18

環太平洋俳句大会

環太平洋俳句大会裏話(一)

乃万美奈子

115

14
24

環太平洋俳句大会裏話(二)

乃万美奈子

116

23
27

環太平洋俳句大会裏話(三)

乃万美奈子

117

20
23

—クツシユマン氏との出合と松山聾学校訪問—

キ仰臥漫録

「仰臥漫録」愛媛で初公開—「圧巻です!」「改めて子規の凄さを知りました!」鑑賞者の感想から—

烏谷 照雄

113

1
5

コ庚申庵

雲汀閑話(1)庚申庵の事ほか 井手 康夫

102

33
34

『記』の系譜—『庚申庵記』を考えるために—

福田 安典

105

9
15

国際的子規・俳句研究

子規の俳句—明治二七年以降の秋の句を中心に—

孫 順玉

100

5
16

子規と万葉集

—「万葉集卷十六」の分析を中心として—

具 廷鏞

100

17
24

報告 国際シンポジウム「正岡子規と俳句」開かれる

二〇〇三年、一〇月一日ソウル、中央大学校で

烏谷 照雄

100

105
115

日本人の自然観と子規の俳句

孫 順玉

100

107
108

子規と松尾芭蕉

愈 玉姫

100

107
108

正岡子規の晩年の世界 J・バイチマン
子規と韓国 和田 克司 100 110 112

韓国の俳句の現状 金 泰定 100 113 111

外国の子規忌 韓国編 松本 博之 104 9 18 114 113 112

卓話 子規さん 日中文化の掛け橋 池内 央 104 29 30

韓日文化交流と子規 池内 央 104 29 30

—二〇〇七韓日文化交流セミナー—

子規と異文化 朴 智暎 119 3 8
孫 順玉 121 1 10

「散策集」について 和田 克司 108 12 22

「散策集」を中心とする 井手 康夫 112 32

明治の松山関係資料提供のお願い

「散策集」注釈(その一) 雄郡・余戸・今出コース 井手 康夫 112 32

神野 香澄・今村 威・福井みどり 113 22 31

「散策集」注釈(その二) 中の川・石手川堤コース 宇和 宣・忽那 哲 115 25 34

「散策集」注釈(その三) 石手・道後コース

井手 康夫・三好 恭治・風本 幸子 117 24 32

「散策集」注釈(その四) 城北コース平岡英 福井みどり 118 27 35

「散策集」と「松山名所三十二句」 二神 將 120 1 9

石手寺近辺の「散策集」について 和田 克司 121 11 18

シ子規庵 井手 康夫 122 30 32

糸瓜の家を訪ねて—根岸子規庵訪問記

松風会 神野 香澄 104 31 34

松風会の人々 白田 三雅 103 20 25

「承露盤」 明治二十九年秋の「承露盤」の構成について 和田 克司 100 80 92

タ「高濱別業記」 高濱別業記 鳶川 武彦 117 3 5

「たるみ」 「たるみ」考—子規の俳論用語— 復本 一郎 100 25 29

ト東温地域の俳諧 東温地域の俳諧について

「西門家旧蔵俳諧資料」を中心に— 神野 昭 106 16 25

ナ奈良「對山楼」 奈良・「子規の庭」、「對山楼」跡に完成

ナ奈良「對山楼」

奈良・「子規の庭」、「對山楼」跡に完成

南岳草花画巻

正岡子規と南岳草花画巻をめぐって

鳥谷 照雄 112

1
8

二日清戦争・日本新聞

和田 克司 105

1
8

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(一)

谷 光隆 102

15
25

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(二)

谷 光隆 103

10
19

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(三)

谷 光隆 107

11
30

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(四)

谷 光隆 109

1
12

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(五)

谷 光隆 111

10
18

日清戦争期における日本新聞の報道と論説(六)

谷 光隆 112

9
18

八俳句甲子園

俳句甲子園から学んだこと

湖城 梓 100

98
99

第六回俳句甲子園観戦記

佐藤 文香 100

99
101

俳句甲子園に参加して

田村 梨絵 100

101
102

澁々園

子規と三津の生洲(澁々園)

「なぜ子規は「いけす」によく行ったか」

マ「松山発子規事典」

松山発(子規事典)

二神 將 107

21
30

特別寄稿「後輩たちは今」松山東高校俳句部

俳諧徒然草

俳句甲子園から学んだこと

第六回俳句甲子園観戦記

俳句甲子園に参加して

松山東高校俳句部の誕生と現状

和田 克司 111

金子 耕大 100

湖城 梓 100

佐藤 文香 100

田村 梨絵 100

戸田 政和 100

二神 將 100

私と子規会

松山子規会

座談会「松山子規会を語る」

「伊豫史談」に見る

子規会創立前の子規・漱石顕彰の様子

司会

戒能 申脩 110

塩崎 月穂・三由孝太郎 100

和田 茂樹・浦屋 薫 100

白田 三雅 100

塩崎 月穂・三由孝太郎 100

和能 申脩 110

塩崎 月穂・三由孝太郎 100

井手 康夫 102

井手 康夫 106

井手 康夫 106

井手 康夫 106

井手 康夫 106

井手 康夫 106

松山子規会平成十八年度総会について

井手 康夫

110

24
} 28

松山子規会平成十九年度総会について

井手 康夫

114

28
} 31

松山子規会南予支部設立十三周年

乾 英司

117

19

―俳句と講演の会―について

松山子規会平成二十年度総会について

井手 康夫

118

36
} 39

松山子規会平成二十一年度総会について

井手 康夫

122

1
} 4

「子規会誌」

「子規会誌」の頒布について

事務局

「子規会誌」目録

「子規会誌」研究対象人物別索引

作成 井手 康夫

子規忌

第一〇三回子規忌法要

外国の子規忌 韓国編

第一〇四回子規忌法要

第一〇五回子規忌法要

第一〇六回子規忌法要

第一〇七回子規忌法要

松本 博之

107

104

111

115

9
} 18

1
} 2

1
} 2

1
} 2

子規ほか資料関係

平成十四年度・平成十五年度

正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

101

25
} 32

平成十六年度正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

107

31
} 34

平成十七年度正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

111

24
} 27

平成十八年度正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

116

28
} 32

平成十九年度正岡子規ほか研究資料・文献目録

松山市立子規記念博物館

120

27
} 30

子規会誌 第二三三号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成二十一年一〇月一九日

発行 松山子規会

振替口座 松山市末広町正宗寺内

印刷所 〇一六二〇一七一八六八

印刷所 ㈱一葉印刷所

電話 〇八九一九五〇三三八

心を
ゆるめて
ゆつたりと

旬味あふれる会席をたのしみ
あふれる湯にお遊びください。

 道後館

愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707
予約専用 ☎089-941-7782 (8:45~20:00) ☎0120-10-4848 (8:45~20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

(有) 二葉印刷所

渡部 ヨシ子

〒791-8013 松山市山越3丁目9番12号 TEL (089) 925-0338
FAX (089) 925-2189

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町13-7

巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452

子規のすべてがここに。

子規選集 全15巻セット
定価 58,800円

【編集委員】

栗津則雄 / 大岡信 / 長谷川權 / 和田克司



四六判 上製・カバー装(各巻368頁~768頁) 定価 3,675円~3,990円 装幀 菊地信務

本選集の特色

- 各界の第一人者によるテーマごとの新しい編集
- 新字・新かな表記、漢文表記には読みがなを付し、読みやすいかたちで子規の言葉を味わう。
- 写真や図版を多用し、子規の世界を視覚的にとらえられ、るよう工夫した。
- 新出書簡を可能な限り収録し、また新資料により年譜の 充実をはかった。
- すべての巻に、人名について注を付す。
- 俳句・短歌の巻には初句索引を付す。

【全15巻内容】

- 第1巻 子規の三大随筆
- 第2巻 子規の青春
- 第3巻 子規と日本語
- 第4巻 子規の俳句
- 第5巻 子規の短歌
- 第6巻 子規の俳句革新
- 第7巻 子規の短歌革新
- 第8巻 子規と絵画
- 第9巻 子規と漱石
- 第10巻 子規の手紙
- 第11巻 子規の俳句分類
- 第12巻 子規の思い出
- 第13巻 子規の現在
- 第14巻 子規の一生
- 第15巻 子規と静岡

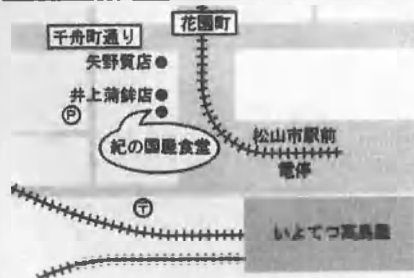
【発行】株式会社 増進会出版社

〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩105-17
TEL 055-973-7117

Z-KAI
http://www.zkai.co.jp/

お食事処・麺処・宴会 (20名様)

紀の国屋食堂



瀬戸内の活き魚料理、
ふぐ会席、猪鍋
※宴会の予約賜ります

松山市湊町5丁目3-5
電話 945-1309
(日曜 定休日)

¥400